世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Research Material : transcript of lecture in Kokugakuin University by Orikuchi Shinobu, The birth of Japanese literary history

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 高雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/958

資料　折口信夫・國學院大學講義

発生日本文学史

伊藤　高雄編

〔凡例〕

・本資料は、国文学者、折口信夫（釈迢空）が國學院大學にて行った「発生日本文学史」の講義を、学生で門弟の小池元男氏が筆記・整理したノートである。

・資料の解題は、國學院大學栃木短期大学國文學會の『野州國文學』第八十六号（平成二十五年三月）及び『國學院雑誌』第一一四巻第一〇号（平成二十五年十月）に報告しているので、そちらを参照していただきたい。

・本紀要に翻刻する資料は、そのノート番号48で、ノートの表紙に「発生　日本文学史　折口信夫教授　小池元男」とある。ノートは、MANUFACTURWD BY SANSEIDO TOKYO製。見開き下段に縦書で黒もしくはブルーブラックのペン書きで記された清書ノートで、右下隅に1～95まで頁数を付し、その90頁まで清書された本文を記す。見開き上段には、内容の見出しがおおむね立てられ出典がわずかであるが引用されている。見出しは、本文に対応するため反映させたが、記された用語の説明や参照すべき文献名、原文などは、小池氏の学習のためのものと見られ、本翻刻では割愛した。このノート整理方法は、先に翻刻したノート番号54・50とも同様で、本ノートには筆記の年度や日取りを記さないが、受講時期を昭和三年か、四年とすることができる。

・表記は、原則として漢字は常用漢字とし、古典的仮名遣いとしたが、場合によっては正字を用いたところもある。また、翻刻の整理に際しては、読解の便を考えて、省略字体や文中・文末表現を若干整えた場合がある。翻字不明の箇所は、□とした。

・本翻刻に際しては、伊藤が翻刻を行い、武蔵野大学兼任講師の渡部修、國學院大學文学部日本文学学科生の柏木義樹（現國學院大學大学院博士課程前期在学中）、同じく史学科百瀬顕永の各氏と読合せをした後、伊藤が整理した。

発生日本文学史　折口信夫教授（小池ノート48）

恋愛発想

日本人は最初に呪言を以て意志を発表してゐた。この永遠の徳化のある呪言が後には恋愛発想の様になつて来る。

万葉の歌でも半数以上に恋歌と見られるものがある。それ以後は八代集によると、ほとんど恋愛気分を含んでゐる。源氏物語やその他の歌物語を見ても、どの部分でも恋愛発想がある。近代まで恋愛を去つたなら物語らひができなかつた。呪言から叙事詩が分かれてきて、叙情部分が目に立ち歌垣の庭などにもてはやされた。呪言は神や天皇から受けた言葉である。が庶民の言葉は歌垣の歌のみであつた。これより短歌、旋頭歌にまはつて行つて、その影響がこれまであつた長歌にも及んだ。長歌は呪言の影響の多いものであるが、短歌は歌垣の部分が濃厚にあらはれてゐる。宣命を見ると、祝詞・寿詞を型にして書き替へたものである。ために宣命にも祝詞と同じ云ひ方がある。即ち呪言から出たものであるから、律文化するところがある。庶民の言葉は恋愛詩で、何でもその型にあてはめて行つた。呪言の発想法に依る例は、

　天の原振りさけ見れば　大君のみいのちは長く天足らしたり（巻二の一四七）

この歌は橘守部が万葉集檜嬬手に始めて解釈づけてゐる。即ち宮殿の屋根から縄が垂れてゐる。それを心にもつて作つたものであると云つてゐる。即ち呪言の形式は常にこの発想法を用ゐられた。それが表現の上へ出なくとも、その心持ちあらば十分であると云ふ考へが知らず〳〵の間に行はれた。呪言の形式を踏んで家主の生命の祝福を述べてゐる。即ち抒情詩であるのに、呪言の型によつて発想してゐる。これが少し進むと、万葉の乞食者詠の如く、

　いとこ汝兄の君。……まをしはやさね、まをしはやさね

と云ふ呪言の固定した形があるに関らず、その中から新発想法を使用して、その心持をはつきりあらはしてゐる。乞食者詠は呪言で、後演出を伴つた一種の芝居である。

この乞食者詠は新しい発想から演劇的のものがあらはれて来るけれども、呪言の形を踏んでゐる。宣命の文体が□□や女官の目録記録に移つて来たから、平安朝には呪言の影響が多い筈であるが、時代が経てゐる為に、呪言の臭味は少ない。それにかはるに、恋愛発想があらはれて来る。どの神楽歌を見てもこの恋愛発想である。神に云ふ言葉は凡て恋愛の言葉を使用した。

　呪言発想（寿詞）→恋愛発想（歌垣）

神祭りの時に神に申し上げる言葉が短歌の形になつたのは、平安朝時代で奈良朝時代はまだ混乱してゐた。

呪言発想が恋愛発想にかはつて来ると、人の死んだ時にもこの神に申し上げると同様な形をとつてゐる。

　岩戸割る手力もがも　たよわきをみなにしあればすべのしらなく（巻三の四一九）

又狭野茅上郎女と中臣宅守との歌も、

　君がゆく道の長手をくりたたね　焼き滅ぼさむ天の火もが

も（巻十五の三七二四）

この如き強い内生活をもつてゐたとするが、これは第二の生活であつて、第一第二の生活の間に誇張があつた。一種の魂をなだめる芸術的の誇張であつた。この霊的なことにも恋愛発想が表れてゐたが、これがすべてに広がつて来た。短歌の真生命は室町時代で終つて、連歌誹諧が起つて来る。

徳川時代は古典であり、明治以後は復活である。室町時代がこの恋愛発想の頂点であり、その頃から真に恋愛発想的な純粋なものが行はれた。たゞ、一つそこに表象的な気分が即ち幽玄な気分と生活と併行してゐると思ふ。この気分が芭蕉によつてあらはれてゐる。新発想のすがるものとしての動きが、幽玄と云ふもので、室町時代にかすかに動いてゐたと思ふ。お伽草紙は即ちそれであつて、その偉大さは恋愛発想を脱して新しい発想を踏んでゐる。徳川時代になると、この幽玄発想と表象的なものが仏教上の影響即ち修道生活がこれに関係したものと思はれる。

奈良朝時代の人間はすべて恋愛発想の生活をもつてゐる。万葉の歌は勿論平安期の歌、歌物語、歌物語から発生して来た物語は皆恋愛気分が濃厚であつた。恋愛発想についでも一つ結婚に関しての一種の考へ方がある。日本では戦争と結婚と区別がなかつた。記・紀を見ると、結婚するときは戦争の形をとつてゐる。奪略結婚は両方の申し合はせである。もと〳〵結婚は□であつた。処女は村の神のものであつた。それを引き離して、奪つて来るのである。風土記を見ると、氷上刀自に嵯岐彦が結婚を迫つた時、刀売は拒絶した。刀売は建石命をして彦を追ひはらつた。大抵の話では、処女が逃げる。垂仁天皇の佐保彦と佐保姫の事がある。即ち高い女の位置にあるもの、最高の位置にある巫女であるためにそれを奪つてくる為には、戦争をして精霊から女を奪つて来ねばならぬ。即ち相手の女についてゐる精霊をうちまかさねばならぬ。

日本の恋愛結婚はもとより三角関係である。

村の神（又は神主）

▽　処女

男

結婚の話でも記・紀に伝つてゐるものは、合理化されたものか、或は後の新しい話で古い話は忘れられてしまつた。古い話は絶妻の話になつてゐる。「ことさか」は神が決定を与へる事である。その時に誓をたてゝ決定する時に奴隷を呈与した。結婚征服は、巫女をその村に娶ることである。征服者は被征服者の村の巫女を迎へた。その夜、女を迎へる時に結婚の式を行ふたのである。巫女が結婚すれば、巫女についてゐる村は巫女のかたづいたものの方へつく。それが巫女の兄とか弟とかに依つて領地の問題が生ずる。

家々の歴史に現はれた特殊な論理

日本の昔の一等古い歴史に入つて見ると、歴史は極く単純である。呪言の形より出た叙事詩系統の歴史である。しかし、これが真実の事件か、否かは、不明である。新事実は新叙事詩にな

つてからである。それすらもその主人公に無かつた事実をも昔の発想法にまねて表現したものである。それが純粋なものになると、その呪言系統の叙事詩は、非常な貧弱なものであつた。呪言の数は知れてゐるが、その呪言の時代には、

一、毎年ある事実

二、実は一度あつた事の繰り返し演劇である。

と云ふ事実があはさつて来る。さうして一の考は次第に遠ざかつて来る。そしてだん〳〵呪言と叙事詩が分れてその中演劇が歴史と叙事詩の間にふらついてゐる。

毎年年頭に唱へる寿詞が、後には自分の家が宮廷に臣下として述べたものが、祖先以来、かう〳〵した職としてと云ふ臣下になつてよりの来歴を述べる。その以前は宮廷の祖先の神が出て来て、神に服従した同じ考へと観念をもつて現在自分が天皇に奏してゐた。

毎年、年頭に天皇の前に唱へる奏上の寿詞が歴史である。宮廷の寿詞は祝詞である。

宮廷及び家々の本縁は非常に単純であつた。家々及び宮廷の歴史を見て、最も疑はしいのは非常に命の長い人、又他の時代にあつた人が異つた時代の人となつて伝つてゐたり、又二様の伝ある様な矛盾は沢山ある。それを一面より見ると、家々の伝へに根本的な矛盾の理由があつたものと思ふ。これは人物錯誤から出て来るものである。同じ書物でありながら二様に書いてゐる。又、同じ事実でありながら、他には異つた時代に書いてある。それは、その家の開祖も現在の主人も同一に考へる思想の存在した時代である。

恐らく昔に於ては神に対する資格と人に対する資格は別である。君主の資格は、神に対する時には永久に一の資格で、異つた人も接してゐるが、人に対する時は別々な資格で接してゐる。それが亦混同して来る。この点を色々の理由から考へ得るが、名前を基礎にして考へて見やう。

時代を超越して一の人格で世に生存した事は名前はその自身に云ひ出したものでないからである。日本の歴史を見ると、その人自身が云つた名はなかつた。他人が唱へる称名（たゝへな）であらはされた。で、名前の資格が定まつたその為にその名を継ぐ事が、君主を継ぐと云ふ事になる。「はつくにしらすすめらみこと」と資格が人より定つて与へられた。人から与へられた名をついでゆく事が名の変はらぬ理由になる。それと共に一つの名が幾代もつゞく事になる。それが何代もなると、それを上にもつた名が出来る。平安朝になると、倭根子と云ふ称名が出て来る。天子の資格をあらはす称名と、天子をあらはす称名が重なつて来る。

天子の資格の称名は、家名である様であるが、さうでもない。その人自身の個性をあらはす名も家名もなければ永遠に伝つて行く名は神に仕へる名である。ところが、同時に一人が、多くの名を持つてゐる。それを根本に入つて考へると、その人のもつてゐる魂の数によつて、その名をもつてゐる。例へば大国主命は大汝と云ふ名やその他色々の名をもつてゐる。大汝は大名持である。一人である人物が色々の人格を持つてゐる理である。

家名もなく、個人名もない事実があつたら一方にむやみに多くの名をもつてゐる。そこに色々の乱雑が起つて来る。沢山の魂が何処から出て来るかと云ふと、それは村々を征服してしまふ事より起つて来る。村々を征服すると、その村々の魂が、皆自身の魂に付加する。更にある魂が親から子に伝はる。大和の大物主は大国主についた名である。それが大国主より、事代主に伝つた。事代主の一部分は、大和の大物主の魂が付加してゐる。一方では他の多くの魂が入つてゐる訳である。この事実を考へて来ると、古代は非常に複雑してゐた。この事柄が家々の代々をば色々に混乱させてゐる。ところがそう云ふ矛盾を統一するものがある。それは家々に伝へた聖職であり、その側から見ると、祖先と子孫を一視しても差し支へない。伊勢の斎宮は第一代の倭姫命からその名を以て斎宮である巫女の名となつた。即ち倭姫命が伊勢斎宮の聖職にある者の名称となつた。武内宿祢の長命も実は親から子へと伝承した名である。この長生きをするには、神秘な職業から出る当然の信仰である。が、後世になると、別な説明を加へる。長生の極端は昔には非常に喜ばれたが、後には自分一人残されると云ふ者にかはつて行つた。

昔は職業が聖であるものは、皆長命を喜んだ。職業でも聖職にある者が後には長生をして、その聖職にある人のみが長い間残される。そこに長生をする人は呪はれて来る。キリスト教でも、ワンダリング・ジウの話がある。日本でも八百比丘尼の話がある。人魚の肉を食べた為に呪はれた話である。嫦娥の話も犯罪で長生を保つた。常陸坊海尊も釣りをしてゐる間に、衣川の戦があつた為に、戦死する事ができなかつた。その為に死ぬる事が出来ない。即ち後には長生をした人は呪はれたくもりある生活をしてゐたのである。

海尊の長生と倭姫の生活を比較してみると、倭姫の生存は祝福せられたものであり、海尊の生活は呪はれた存在であつた。同じ長生に於てこの思想の転換がある。古代の聖職にあつたものは皆長生をした。

神だちめは神だち即ち神の召し上がり物を奉る聖職である。そこに侍る人と云ふのである。聖職にある人は皆長生した歴史をもつてゐたが、人間性にめざめた歴史をもつ様になつて来ると、どうしても矛盾を生じて来る。この聖職に付属した名前が矛盾な論理を持つてくる。

宮廷に仕へる聖職の推移

日本の古書を見ると、家々の職業は神代以来のものである。その代表者は五伴緒の神で表してゐる。ところが実際に於ては家々の職業は推移してゐる。

祝詞を見ると、

　高天原に神づまりますすめらがむつかむろぎ・かむろみの命もちて……

と書くのが本式である。「みこともちて」は命令を伝達して云ふ意味で、「みこともちて」以下は伝承者、伝達者の言葉になる。祝詞の言葉は最初は天皇のお言葉である。「かむろぎ・かむろ

みのみこと」は天に居る尊に父母の言葉を云ふことである。此の以前に遡ると、天皇は神であるから、その伝達はなかつた。後世にも伝達が出来たのである。それが又変つて言葉を云ひ出す人となる人との間に伝達者が必要となる。神と人との間に天皇があつた。その天皇と神との間に又中皇と云ふものが出来てきた。

中臣は「中つおみ」で、臣は部下について天皇が尊称を以て云はれる語である。中つは「中つめら」と同じ中である。段々、天皇が臣下に物を仰せられることが無くなつて来た。さうして専ら中臣が云ふやうになつた。即ちそれは天子の勅は法の効果をもつて来た為に、伝達者の中臣が云ふやうになつた。中臣が聖職の中、最も高い位置になつて来た。これは天神と人間との間にある伝達者たる天皇の仕事の一部分をもつやうになつた為に中臣の家筋は、尊ばれるやうになつた。天皇の仕事の部分でも中臣の仕事は法令の効果を持つやうになり、まじつく方面は斎部がもつやうになつた。

斎部はいはふと云ふ語より見ると、もとは魂を鎮める仕事をした。それと共に複作用として、土地場所を清める祓ふと云ふ条件が出来て来る。それが、いむ・いはふとなる。

斎部は神の代理者になる。即ち呪言を唱へる代理者としてのせりふが発達して演劇の動作が発達して来る。後世の祝詞を見ると、中臣の祝詞の中に斎部の唱へる祝詞がある。斎部の祝詞はたいていまじつく的のものである。忌部の唱へる祝詞は中臣の祝詞の一部分として発達した。この形が日本叙事詩の中に非常に大切なものである。中臣の呪言の中に忌部の唱へ言が孕まれて来たと云ふ事が叙情詩の展開に重要なる位置を持つてゐる。即ちその中臣の祝詞の中にまじつくの部分が叙情を生み出して来る。

中臣祝詞
　　中臣祝詞
　　忌部祝詞

忌部の仕事から一方（形式的に見れば）分れが出た。物部は、にぎはやひと云ふ魂をもつて天皇に征服された。この物部の呪言を忌部がやつてゐる。門部の仕事も物部の仕事も忌部の仕事と同様の事をやつてゐる。これは忌部の仕事とくつゝいて来たか、それから分化したか疑問である。

又忌部から形では物部が出てゐる様である。中臣の職業の系統から卜部と云ふ職業が出来て来る。

聖職にこの変化があるのである。これは日本の論理の自然的推移である。

猿女の家も鎮魂の聖職をしてゐた。それは第一期の叙事詩の家（語部）であつた。その猿女から色々の仕事が出て来る。猿女の君の男は宮廷の門部にゐて

家々の本辞旧辞をとくに当つて、必しもその物語が藤原都頃もつてゐた職業起源をもつてゐた事も正しい事柄である。

日本人のものと繰り返さねば気がすまぬと云ふ発想法から出て来た論理が日本に発達して来る。これは神より伝達の形より出てゐる。近世では狂言のあひがたりの形を生み出す。二度繰り

返す事は沢山あつた。
出雲国造が二年つゞいて上つて来る。
　最初の年は、須佐之男命の呪言
　次の年は、大国主命の呪言
を唱へたと思はれるが、後には同じ呪言を二度繰り返しに来る。即ち繰り返しの形式をとりこんで同じ呪言を唱へる様になつたと思はれる。此二度繰り返す事は日本文学の発想法に重大な事柄である。

帝紀―旧辞

古事記の序文を見ると、帝紀旧辞の語が見えてゐる。
　故惟撰二録帝紀一、討二覈旧辞一、削偽定実、欲レ流二後葉一。
古事記には、帝紀旧辞と同じ様な対句を三ヶ所に使用してゐる。大体、同じもの、様に考へられてゐる。
　即勅二語阿礼一、令レ誦二習帝皇日継及先代旧辞一。
とあり、又、
　於レ焉惜二旧辞之誤忤一、正二先紀之謬錯一、以二和銅四年云々一撰二録稗田阿礼所レ誦之勅語旧辞一云々
又、之等より先の方に、
　帝紀及本辞、既違二正実一、多加二虚偽一云々
と出てゐる。
旧辞・本辞は両方とも「もとつごと」である。日本では辞と物語と殆んど同じ内容をもつてゐる事は、即ち呪言及叙事詩である。篤胤は、本辞と旧辞は古い辞書の如きものであると教へてゐる。この論の暗示は、天武帝の時、新字と云ふ辞書が出たことがあり、又延喜式の神祇官に関した事を書いたところに、神語に云々とあり、これらを見て篤胤は、暗示を得たと思ふ。この者はまだ足りないものである。旧事紀と云ふ書がある。これは「もとつごとぶみ」と読んだのであらう。日本の歴史は凡そ物語と云ふ語で云はれてゐた。物語は平安朝では小説と歴史と断片的の逸話の三種類の内容を感じてゐる。そのもとは、奈良朝以前の歴史観から出て来るのである。こゝに宮廷の方面から考へてみやう。
祝詞は「高みくら」である。のりとはのりとを仰る場所である。あまつのりとのふとのりとごとは、「高みくら」を示したもので、そこで云はれるものがのりとごとである。そこで云はれる語は法律である。法も憲ものりである。のりとは、広く、詔旨、宣命、祝詞、皆、「のりと」である。つまり、広い意味では下におろしになる呪言である。天皇がおつしやるとそれに返答する詞を群臣が申し上げる。それを、寿詞、奏事、奏辞と云ふ。まをすは、まひより出た語で、服従すると云ふ意味の語である。天皇の勅に対し、繰返して申し上げる事が「まをしごと」である。
私は天皇、天神の資格に於いて……云ふのであると天子が云ふと、群臣は私の祖先はかう〳〵して服従して来ました。私も、かう〳〵して服従しますとまをしごとをする。
この証明は、祝詞と寿詞の間に変なものがはさまつてゐる。中臣の寿詞はこれである。

大嘗祭に中臣が臣下の代表として、臣下の家々に伝つてゐる寿詞を唱へる形をとつてゐる。古いところは、決してさうではない。天皇の祝詞と寿詞との間に立つてゐるものである。天皇のおつしやる祝詞を臣下に伝へるものがある。中臣が臣下に伝達した形を持つてゐる。それで中臣の寿詞は祝詞と寿詞の間にあるものである。即ち祝詞の意味を復習するもので、その下に寿詞がある。平安朝百年の間は、まだ古い盛を残してゐた。この辺の歴史は非常に必要である。天皇の言葉を伝へる形が色々ある。その中で、「宣」の形が最も普通である。「女房宣」と云つて、上の女房が天皇の勅を筆記して下へ伝へることである。即ち天皇に仕へてゐる上の女房が天皇の詔を伝達する役をもつてゐた。古代の宮廷の上の女房は云ふまでもなく巫女である。宮中に昔から天皇のお側に仕へてゐる女房がある。即ち、猿女君の家の人である。これが次第に大巫と交迭して来る。女房が宣を出すことは、天子の言を群臣に伝達する事で、それが書物にするやうになつて女房宣と云ふ様になつた。

祝詞の言葉が巫女に依つて貯へられてゐる。その為、巫女が最初から「みことともちて」と伝達の形をとる。大祓の祝詞、鎮魂の祝詞、皆、巫女の記憶に残る様になる。これに依つて、系統が附く。古い伝承に猿女伝承の如きものがある。天皇の祝詞を覚えてゐて、場合場合にこれを「みことともちて」群臣に伝達した。こゝに於いて、宮廷の叙事詩が出来て来る。最初は、天の岩戸の前で、天の宇受売命がみことをもちてすることに始まつてゐる。宇受売命は、鎮魂の起源と、猿田彦と共に国神を屈服させる交渉した後に、猿田彦を操るやうになつた。

天つ罪をとかねば天の石窟の事が出て来ない。須佐之男命は、天つ罪によつて、その「はらへ」をした。「はらへ」は罰をつけて、物を取り上げる、又は、追放する事である。これに鎮魂の話がある。うけひ、はらへ、魂しづめ、天の岩戸の話があり、紀には、宝剣出現章がある。それはずつと一つゞきになつたものである。それに続いて天孫降臨がある。五伴緒の命がついてくる、その間に猿女命が働きをする。

神代の章には、猿女の命が働いてゐる。これは、色々の伝承の中、猿女の伝承が一貫して統一したもので、その統一したものが、神代巻の組織である。これが、神代巻の出来る原因でもある。猿女氏が宮廷の語部の祖先である。稗田阿礼は猿女君の分れである。猿田彦へついて、伊勢へ行つた猿女の系統と猿田彦との系統は一緒になつて了つてゐる。

猿田彦は「宇治の土公」の分れであるから、やはり猿女の系統を引いてゐる。阿礼が、宮中の語部である事は考へられる。大体、かうして宮中の物語系統が出来て来る。豪族の家でも同じ論理でなり立つて来る。

氏々の話

氏々の方では、氏々が宮廷に対する態度を云ふと、宮廷に対する寿詞即ち宮廷の祖先に仕へ申した歴史を申し上げ、祖先がかうである様に、その子孫の吾々もその天皇に対してお仕へ申しますと云ふ、服従を示す唯一の形式である。この寿詞を叙べる

時に、附帯した仕事は、その氏々の持つてゐる外来魂、即ち氏々の持つてゐる威霊を天皇に奉る儀式がある。草木金石等によつて天皇の寿命を譬喩的に述べる。この形式は疑ひもなく、天子のおつしやる祝詞、後には伝達者の祝詞を、その通りであると云ふ形をつけるものである。それが、後には自分の感情になつて来て、寿詞の方では、私の祖先がかう〳〵為したと云ふ様になつた。最初は、天皇がお前の子孫はかう〳〵して服従して来たと述べると、群臣の方で、その通りに繰り返して、後には証明する形から変つた。即ち祝詞を、も一ぺん繰返した形である。宮廷の叙事詩が臣下の叙事詩へ入つてゆく事がわかる。即ち臣下に浸透してゆく経路がわかる。

中臣の寿詞は氏々の寿詞が祝詞の後演であつたものであるが、今度は氏々の方を中心にした形である。さうして臣下の話と宮廷の語と異つてゐるが、似通つたところのあるのは、この事がある為である。

寿詞は宮廷の叙事詩を取り入れた叙事詩で、同時に「うけひ」を取り入れたものである。つまり、氏々は断片的に宮廷との交渉の叙事詩を持つてゐる。氏々の寿詞が、その職々の本縁を語る事になる。つまりそれが家々の「もとつごと」である。で、「もとつごと」は宮廷との関係による職業の起源をとくもので、後には「氏文」となつて来る。氏々にもとから伝つたその氏自身の叙事詩は宮廷から入つた叙事詩に負けて了つた。

語部の仕事は猿女がしてゐたが、猿女の歌も大切な仕事は鎮魂である。猿女の鎮魂が勢力を失ふと呪言が勢力をもつて来る。即ち神聖な古い言葉として、叙事詩に勢力を持つて来る。宮廷の語部には中臣の志斐連があつた。宮中に男中臣と女中臣が奉仕してゐる。即ちそれは異つたものである。低い巫女で、中臣女と云ふものがある。その団体を支配してゆくものは、中臣の志斐連である。万葉集三に、

いなと言へど強ふる志斐のが誣語り、此頃聞かずて、我恋ひにけり（二三六）

いなと言へど、語れ〳〵と宣らせこそ、志斐いは申せ。誣言と宣る（二三七）

とある。語部の職業が分化して、貴族の子弟の教育に叙事詩が語り聞かせられたものと思ふ。

中臣志斐連は恐らく語部であつたと思ふ。即ち中臣家の家長が女であつて、物語を伝へてゐたものと思はれる。中臣と云ふのは、藤原といふ家に関する伝承ではなくに、中臣と云ふ職業に関する伝承である。思兼神より出た中臣の職業や中臣に伝つた寿詞である。中臣の伝承は中臣の職業を有するものに伝つたもので、藤原氏はその一部である。

中臣と云ふ伝承があつて、それを志斐連の女が宮中に居て中臣の語りを伝へるものとして、宮中に仕へた語部であると思ふ。そこで猿女の職業が失はれて来るのである。その語部が次第に進んで来ると、安曇の海部の天語が宮廷に入つて来て、宮廷の鎮魂と結合した。

猿女の鎮魂

物語の鎮魂

安曇の海部の鎮魂

になつて来る。安曇の海部のは外部から入つたもので、宮廷へ資料を持ち込んだのである。記紀を見ても、海部のものと思はれるのが沢山ある。

令記定帝紀及上古諸事

これらについて話をつゞめたい。

蘇我氏が亡びた時にやつと伝へたと云ふ国造本紀、即ち古事記のもとの本である。後に出て来るものを照らし合はすと十八種の纂記でつぎ文である。口の上の系図を書き留めたものが、纂記或は譜代と云ふ。継事は系図の中に簡単な体裁をとつてゐる。古事記下巻の体裁はこれをとつてゐる。つぎは、口の上の系図で、つぎを記したものが、つぎふみである。

本紀は支那の正史の形を真似たものである。

十八種の纂記は、国記と体裁が異つてゐる。

宮廷で云ふと、それが帝紀日継である。日継と本紀とは、異つてゐる。帝王のであるから日継、臣下だからつぎと云つた。其の他家々の聖職の歴史をとくものがある。系図の方がつぎになり、寿詞から出た聖職の起源をとくものが、国記の本紀に当るものと思ふ。諸八十部本紀と云ふのは、多くの聖職にある人々の起源を説いたものを書き取つた事になる。

帝王本紀もこの系統で、帝紀も同じ聖職をとつたものである。即ち天子の起原を説いた祝詞を書き取つたものが、帝紀である。本辞は、同じく聖職の歴史を説いたものである。本辞、旧辞も、皆家々の聖職の起元を説いたものである。帝王日継はこれと異つてゐる。帝王日継は、読む必要あるのは、何時か。又、家々のつぎもその読み上げる時はその人が死んだ時である。名前の伝はると思ふ印象と、死んだと云ふ自覚を与へる。この二方面から、つぎ文、又は日継を読み上げる。

後には色々混じた。誄詞も古い形では家々の歴史を語るつぎの形と誄詞として述べた。それが変じて、その家に附属して人がその聖職の歴史を語る。これが誄詞である。日本紀を見ても宮廷でするものは、日継と書いてゐる。その他の誄詞は事、辞、時と書いてある。臣下のものは死への魂を鎮める為とも唱へられたものである。

つぎと家々の物語は別である。

然しもとは物語の中からつぎが出て来たのである。つぎを奏上しねばならないものがある。それは人間の死んだ時である。即ち物語の方が古いのである。帝紀と帝王本紀は、明らかに別なものである。即ち帝紀と帝王纂記と別で臣下では本紀と先代旧辞又は本辞と別である。

帝紀とか旧辞とか帝王日継とか云ふものが出来る時代では宮廷の伝記と臣下の伝記と融合しあつてゐる。聖職の起源を見てあげる時に祝詞と一緒に申し上げる。その為に融合した。

書き物の中に伝つてゐる事実、書物と同時に決せられてゐた事実、それを又統合した事実を語つてゐた。それを書き取つたものが、古事記である。稗田阿礼の仕事はこれを合一して暗記してゐたものである。古事記には結局帝紀と本辞を合せたものである。

帝紀と云ふもの、歴史を考へよう。
帝紀は一つの正しい帝紀だけのもので、後には正史と同じ意味をもつて来る。この意味から古事記は帝紀日継の如くなる。六国史の他に宮廷の歴史を説いたものである。即ち宮廷中心の歴史を説いたものである。帝紀の理想的なものは苦しみ抜いた場合、日本紀である。日本紀以前に帝紀と書かれたものがある。正倉院文書や古京遺文、南京遺響?を合せた南京遺文と云ふものがある。日本書が帝紀の一部分であると
これは、帝紀か日本書か分からない。
日本紀は日本書の伝である。伝の日本紀は三十冊ある。日本書二とあるのは日本書の第二番と云ふ事ではなく、日本書二冊と云ふ事であると思ふ。書とは歴史の経である。?
帝紀は史記、漢書などによると本紀に当つてその他、色々の部分がある。日本書も正史である。貧弱なものに違ひないが、帝紀でこれより出たものが日本紀である。
これは編年体でごまかしてゐる。即ち家との歴史が没して行はれなくなつて来て、この編年体のものが系統づけた。

語部の伝承の中一つ「つぎ」を伝承するのが大きな忘れられた仕事である。つぎは「世つぎ」と云ふ形で伝つて来て、語の意義は転じて来たが、系図の意味がある。平安朝あたりに「世つぎ」と云はれてゐるのは、代々伝承の次第を述べてゆく書人系図である。
古い形の世継は書かれてゐやうがゐまいが「世つぎ」である。記録をし始めた時代には、纂記(ツギブミ)と書かれた。又譜弟とも書くが、やはり世つぎに属すものらしい。宮廷の世つぎは天より伝承されたものである。日は日の神を示し、神聖を示すものなれば日継と称してゐる。古くは長い間、口の上で伝へられたものである。氏々の系図も同じ道を通つてゐたものである。これをさかのぼつて見ると、天子の威力となる魂の系統を示したものである。古代は、この魂の考へ方より人の生滅は問題にならない。ずつと古いものは日継、世継はないと思ふ。即ち武内宿祢の長命のことなど行はれる時代である。
人格と神格とが明らかになる時代が出て来て初めてつぎが明らかになる。日の神の魂を継承するものが「日つぎ」であるとも云へる。
奈良朝以前のつぎは人間が生存のためではなく、死の為のものである。「つぎ」に入れる事が、「つぎつ」と云ふ動詞である。これは「つき—らる」に入れる事は、死が明らかに認められた事である。死か否かの区別が定まるまでは、死生の問題はあいまいである。この間は殯宮に居らつしやるものである。
この間に生死が定まるのである。この間に鎮魂の儀式を繰返す。みたまふりは家々の人々が唱へ言する、即ち奉仕の本縁を唱へて、寿詞を申し上げる。古い時代の誄詞は実は誄詞では無かつた。昔行つた誄に当るものは、寿詞であつた。死んだ時に唱へる寿詞が即ち「しぬびごと」であつた。人が生死不明の時に唱へるものは、生きてゐる人に唱へる寿詞と同じである。殯宮から御陵に移す間は決して生死を区別してはゐなかつた。その為

に神職が葬式にあづかるには、御陵以外にはいけない事であると思ふ。

支那の風が入つて来ると死してからの寿詞が誄であると同じ意味をもつて来る。又「語」の字をも書いてゐる。日本紀の本紀旧辞である。正月唱へる寿詞にも「事」の字を書いてゐる。もとの誄に当るものは、寿詞である。その為に死人を悲しんだり追懐する時の言葉は少しもなかつた。奈良朝あたりから悲しみが深くなつて来た。この時代の誄は古代のと別のものである。人がいよ〳〵死んで了つてから聞かせるものが「つぎ」である。この「つぎ」と御陵なり前に司々が唱へる旧辞が一緒になつて、「しのびごと」となつて来る。この事は日本紀にも書きあやまりがあると思ふ。大体陵墓の前で唱へるものが「つぎ」である。「つぎ」は汝は死んだのである、と云ふ自覚を起こさせるのである。この世に居ない人であると云ふ自覚を起こさせるものと云ふ意味なり。つぎは過去の生存の紀念と云ふ意味である。

ところが名前を継がれる事なしに死んでゆく人がある。すると死んだと云ふ自覚を起さない。完全に内在魂を発散させる為につぎの価値が出来て来る。つぎが発達しかけてゐるが、過去の生存を明らかにするやうになり、又転化して口の上の系図に入らないものをつぎの中に入れると云ふやうになつて来る。

昔は傍系のものは別に「つぎ」を作つた。この系図はその出来る前に於て傍系の力強い人が死んで了ふと、それを伝へる為に御名代部・名代部・名代を作つた。即ち何々部と云ふ団体を作つて、その部落が、その人の生存中の事を語りついだのである。名代部が荘園の起源になる。世が進むと、傍系の人の為に系統はどうする事も出来ぬが、その人の系統があの村の頭となつてゆくのが出来ると云ふ形になる。

子代部は子が無い為にその系統を伝へんとして作られた部で、寵愛された女が死ぬと子がない為に系統が伝はらない。その系統を伝へる為に子代部を作る。後には子があつても作られるやうになつた。名代・子代は同じものであるから、後には混合して了ふ。名代、子代はその部落を作る動機になつた人の物語を語り伝へるものを条件とした。大和の春日部は軽勾大兄皇子が春日皇女のところへ通はれた物語を伝へてゐる。この物語は沼河姫と大国主命の情事の焼き直しに過ぎない。これを見ると、名代部を作るとその村に叙事詩を伝へねばならぬ事から理もない叙事詩を伝へたものである。子孫が、その部落の頭になつてゆくと、世継が出来て行く。

物語と世継の発生前後が考へられるが、私は物語が単純化して世継が出来ると思ふ。

物語を伝承するのが語部の仕事である。色々の物語を伝へる為に、その部落の間に混雑が出来て来る。これを単純化せねばならぬ。その単純化されたものが世継である。名代のみでなく、本村にもそれがあるのである。

人の死んで新しい村を立てられる様な人は先づ最初語られる物語を起したのであるが、後には多代にも世継が出来て来る。同時にはじめからつぎを唱へた名代の村もある事を知る事が出来る。古事記の終の方は非常に簡単なつぎの形をとつてゐる。

日本の古代の村々には、勿論血族関係のあつたものもあるが、血族関係のない村でもあつたかの様に考へられる。これはつぎの混同である。単純に意識的に混同するのではない。巫女が神懸の時に云ひ出す記憶が狂ひを生じてゆく。即ち事大主義の希望が神人の心持ちを動かして来て、次第次第に村々が同じ系統になつて行く。その村に正しい系図を伝へてゐる村と多少異つたものを使つてゐる村々がある。即ち系統の異なる村々は大きな村の系図に近寄つて来る。

つぎを概括して考へると、つぎの重んぜられたものは頭の系統を伝へる為に重大だと云ふが、本質は怨霊退散である。それが後になると、自分の有する偉力は伝説があり、継承があるのである。それをのべてゆく呪力の源となつてゆく。その呪力の源は、天の神より魂を受け継いでゐるからである。魂の受け継ぎがかつて云ふ方が正しいとするのがつぎの唱へ方によつて来る。こゝではじめて、国の実生活の上に関係を有して来る。ところが又更に変化して来る。呪力をもつてゐる神力を宿す事に使つたのが、君主族長の現実な人格観の神格を乗り越えてゆく。するとその考へが変つてゆく、とこの人は長い時代を継いで尊さを保つてゐた、と云ふ事実証を考へて来る。さうしてつぎを諷誦したのである。こゝに於て、つぎはいはひごとを唱へると同一の効果を持つて来る。

恋愛求婚の時の名のりにも単純に寿詞系統のみとは云へない。簡単に自分の家の系統を叙べるのである。名のりは、このつぎを述べるものではなかつたらうか。つぎが寿詞の力をもつて来る。名のりにも、いはひごと系統の名のりがあつたが、片一方簡単なものがあつたのである。戦争と恋愛は相手の魂を征服して了ふものであるから、よつぎより発した名のりを唱へる。崇神天皇の時に大物主が祟りをなして困る為に（日本紀）。

宮廷詩

皇極天皇は天智天皇の御子、建王が死なれた時、非常に悲しまれた。その歌がある。斉明天皇四年の歌三首

今城なるをむれが上に雲だにもしるくし立てば何かなげかむ

射ゆ鹿をつなぐ河辺の若草の若くありきとあがもはなくに

飛鳥川水ぎらひつゝゆく水の間もなくもおもほゆるかも

その年の中に牟婁の湯に御幸なされて歌つたものがある。

山越えて海渡るともおもしろき今城の内は忘らゆましじ（一）

水門のうしほの下り海下り後もくれにおきてかゆかむ（二）

うつくしきあが稚き子をおきてかゆかむ（三）

その終の所に秦大蔵萬里に言ひつけて、この歌を伝へて世に忘れしむること勿れと仰せられた。この言葉は斉明天皇の四年の歌と十月の歌とに及んでゐるのである。

秦大蔵造萬里は外国人である。この文句は、一種の御名代部、御子代部である。この歌は秦の大蔵といふものを中心とした後の荘園である。秦の大蔵が作り始めて伝へたと云ふのである。これは宮廷の歌をば、作るもの、あつた証拠である。帰化人が

歌を作つた事が多い。帰化人は言葉さへ覚えれば、代作したのである。日本の最初の散文の宣命は帰化人の手になるところが甚だ多い。帰化人が歌にも手を出して、それをすゝめて来た事は軽視する事は出来ぬ。

私は萬里が宮廷詩人であることを考へてゐる。皇極天皇は非常に歌が多い。これは代作である。この歌は、歌に個性がはつきりしてゐる。これがその関係を見出す資料となるものである。天智天皇頃、飛鳥都の末の歌は、その整頓が明らかである。前時代より非常に進歩してゐる。飛鳥都時代では代作家が目について来る。同じ代作詩人の様な人がも一人見えてゐる。天智天皇の皇太子の頃愛してをられた蘇我山田大臣の娘が父が亡ぼされたのを悲しんで死んで了ふ。その時に皇太子に野中川原史満（孝徳帝三年三月）が歌をうたつた。

山川にをし二つ居てたぐひなくたぐへる妹を誰かゐにけむ

もと毎に花は咲けども何とかもうつくし妹が又さき出来ぬ

皇太子は喜ばれて、琴を授け歌はしめられたと見えてゐる。この野中史満は帰化人である。野中の氏であり、大和へ来て、川原にゐた為にこの名がある。

この人がやはり前述の如き立派な歌を作つてゐる。実は皇太子の代作である。

飛鳥の都から代作気分が濃厚になり、詩の素養のある人か帰化人がした、その為に創作的になる。

日本紀を見ると、清寧天皇の御代がよかつた為に、それを讃美したものがある。当世詞人が、

やまとべに見がほしものは忍海のこの高城なる角刺の宮

当世詩人は当時の歌作り人を云ふのである。日本紀では書き分けてゐる。時人歌とあるべきが詞人とあるから歌作り人と云ふ意味であらう。も一方宮廷の詩人を詞人と書き、民間のそれを時人と書いたものと思はれる。日本紀で注意すべきは飛鳥の都の中頃から童謡（ワザウタ）が非常に増加して来る事である。民間にも常に歌がおこつて来る。その為に内的に創作気分が出るところへ帰化人や詩人の手によつて、外形が整つて来る。万葉の歌はこの洗練を経て来たものである。当世詞人の歌は、宮廷詞人の代作歌と見る方がよいと思ふ。

宮廷詞は日本の文学史の上では三道に分れてゐる。宮廷詞は大歌と云ひ、民間の歌を小歌と云ふ。歌の長短の区別によつてではない。歌の出所によつての名である。江戸のはじめから検校、勾当の方で守る歌を長唄と云ひ、俗つぽいものを端唄と云ひ、民謡を小唄と云ふ。歌舞伎の歌を中心にして発達した。かくの如く歌の出所から名をつけてゐたのである。この名称は古くからづつと続いてゐた。

大歌・小歌の対照が長唄・小唄の対照となる。平安朝の大歌は宮廷の神祭の歌である。一口に云へば、神遊びの歌である。奈良朝で云へば正しい歴史的の正しい伝説を持つてゐる為に、権威を認められた舞の歌である。これが奈良時代を中心としてゐた頃の観念である。万葉で云ふと、雑歌である。

そのも一つ前の時代になると、飛鳥朝の面影の残つてゐる時代のものははつきり分れてゐる。それは呪歌（呪文）の意味がは

つきりしてゐる。

第一期　呪文

第二期　舞の歌

第三期　神遊の歌

宮廷詞の全盛期は奈良朝を中心とした時代である。

〔詞　廷　宮〕

- 言　真
  - 詞　魂　鎮
    - 鎮魂
      - 神遊（神楽歌）
      - 羇旅歌
        - 宴遊歌
        - 深更歌
    - 挽歌
      - 鎮魂歌（アンビベノウタ）（遊　部）
      - 新挽歌（悲しみの入つたもの）
    - 相聞歌
      - 歌垣歌
        - 連　俳
        - 踏　歌（奈良朝の舞踊）
        - 新短歌（平安朝）
    - 軍歌

真言はすべて魂を鎮めるために使用した。即ち「たまふり」である。魂を体に附加する信仰である。魂ふりの信仰からして魂ふりの詞が色々の意味に応用されて来る。その本体を続いだのは神遊・羇旅歌である。羇旅歌が完成されたのは、万葉集で、外形は支那文学の影響である。

内的の原因は魂ふりである。旅に出る時にはその夫に対して妻がまじなひの紐を結ぶ。後には阿波路結びとかあは結とか云ふ。この紐を結ぶ事は魂を結びつけておくことである。羇旅歌には鎮魂の意味が非常に深く入つてゐる。

深更歌は夜中の歌で抽象的の歌が出て来る。挽歌の方面を見ると、竹林楽と云ふのが万葉集にある。この竹林楽の注？は宮廷詞から出た挽歌である。日本の挽歌はかなしみが無い。魂を鎮めるだけの効果があればよい。鎮魂の期間は生死の区別がない。挽歌は畢竟みたまふりである。古い歌ほど平気な気分で挽歌をよんでゐる。後には悲しみが出てゐる。これは支那風の挽歌である。新しい挽歌である。古いものの中、鳥が出て来るのはたいてい挽歌である。天智天皇が死なれた時に后が作られた歌がある。これも鳥が出て来る。鳥の歌は皆鎮魂の歌である。鳥は魂を扱つてゐる役である。

軍歌は記紀を見ると、神武天皇あたりに固つてゐる。この軍歌は神武天皇頃出来たものも後に出来たものもあらう。大和に戦のあつたのは、神武天皇頃が最も甚大なものである。後世のものもこれに帰服して了ふ。軍歌はかけあひである。相手の魂を征服するためである。近世の悪態はこれである。江戸の文学では、変態の発達をしてゐる。その為に文学の本態に入るまでには色々の色彩を附加してゐる。恋歌は殊にこの形をとつてゐる。恋歌で注意せねばならぬのは恋歌と

踏歌の歌は古い時代の宮廷詞をうたつた。

飛鳥の末から童謡が行はれて来た。古い時代に於いて、高い位の神はしやべり、低い神は口を開かなかつた。癒はこの低い精霊である。口を開くとべちや〳〵むやみにしやべる。これが神社系統の演劇に見える狂言である。

神の託宣が盛んに行はれて来たのは、国家組織がまとまり出してからの事と思ふ。飛鳥の都の中頃から童謡の出たのは、託宣から出たもので、時代にのつて来たものである。宇佐八幡の託宣はこれで、当代しきりに託宣を行つた。わざは神事と云ふ事である。神ごとの歌と云ふのである。その為にわざ歌を非常に恐ろしがつてゐた。時人歌、童謡は総括して、わざ歌である。

託宣
- 童謡（ワザウタ）
- 時人歌

わざ歌は神懸りした童、女子の歌を出した歌で、時人の歌は神事に関係なく漠然と流行しだした歌である。斉明天皇の時には、へあめなるや葛城寺の西なるや、の歌が流行した。その為に皇太子の問題を考へ感じて来る。

童謡で名高いものがある。斉明天皇六年百済と新羅と戦があつた。当時の童謡である。これは、どうしても解らぬ歌である。これが理想的のものである。

時人の歌はも少しはつきりしてゐる。童謡に近い歌と時人歌と区別する事が出来ないものがある。孝徳天皇の時に常世神流行がある。河勝がこれを殺して了つたので流行した歌である。皇極天皇三年の歌がある。老人どもは時のかはるしるしだと噂したと云ふのがある。

宮廷詞の中の軍歌は神武天皇の巻に出てゐる。それをば久米の歌となづけてゐる。もつとたくさんあつてよいはずであるのが、昔からの習慣で歌詞に自由な融通のつく考へから沢山なくてよい事になつてゐる。類似といふ事より論理を展開してゆける。詞も数意を含むことを信じてゐた。祝詞の八意思兼神は祝詞の神である。祝詞は漠然とその効果が応用出来ると云ふ考へである。思ふは祝詞を唱へる事である。この意味のために久米歌はどんな場合の軍歌にも応用出来る。その事を考へると宮廷詞の意味がわかる。宮廷詞が宮廷の祭礼儀式なりに、それに関係ある歌を唱へられるといふ考へは誤りで、色々の場合に類似してゐる時は広くその歌詞を用ゐられた。久米歌もこれである。

記紀を通じて見ると、久米歌以前に軍歌らしいものはなく、景行天皇の歌も、佐保彦の時の歌も軍歌ではない。それは昔から軍歌を歌つた。日本紀と古事記の初めの方に久米歌が出てゐる。神武紀にある歌でも記紀ともに多少異なつてゐる。軍歌の後に左の註がある。

是謂来目歌今楽府奏此

この解釈は徹底したものではない。楽府は昔の註には、とよのあかりとある。これは宴会の意であるが、楽府にこの読みを用うるのは誤りである。私は楽府は宮廷詞の中のあるもの、即ち土地の神の祭りに使用するものであると思ふ。手量は調子をとることだと云ふ説がある。たばかりのはかりは、□□の事で、たばかりは手を拡げる大小で、舞の手振りのことである。

久米歌は早く亡びてしまつた。平安朝の中頃には久米歌の節は亡び、舞のみが伝つてゐる。文句は伝つてゐるが、節廻しはすでに奈良朝時代に亡びてゐた。久米舞の本質は戦争の終つた後、軍使をねぎらふ歌としてである。軍のはじめにこの歌を歌ふのは、変であるが、後には平気で歌はれた。

神風の伊勢の海のおほいしにや　いはひもとほる　しただみの　したゞみのあごよ　あごよ　したゞみの　いはひもとほり　うちてしやまむ、うちてしやまむ

この歌の「あごよ　あごよ」は、ねぎらひの歌詞である。軍師をねぎらつてゐる歌である。

忍坂の大室屋に人さはに来入り居り、人多に入りをりとも、みつみつし久米の子がくぶつゝい石つゝいもち　うちてしやまむ、みつみつし久米の子らがくぶつゝい　石つゝいもち　今うたばよらし

この後に皇軍大悦仰而

いまはよ、いまはよ、あゝしやを
いまだにもあごよ、いまだにもあごよ

古事記では囃詞になつてゐる。

伊碁能布は休ませると言ふ語である。

いまはよ云々の歌は、ねぎらふだけの歌である。

これらを見ると、神武天皇の時の軍歌は皆休息してくれと云ふ軍歌である。

みつ〳〵し久米の子等が粟生には薤一莖其根が莖其根芽つなぎてうちてしやまむ

みつ〳〵し久米の子等が垣下に植ゑしはじかみ口ひゞく吾はわすれじうちてしやまむ

「うちてしやまむ」は打つ、さうして終にしやう、と云ふのである。即ち休息を予期してやるのである。戦争とかまけによつて出かける時は労ひを約束して出かける。日本の「ねぎらひ」は願ふの語根のねぐと同じ報酬を与へると云ふ事である。久米の歌にねぎらひを望んだ歌が多い。これを戦争のはじめに歌ふのは当然であつた。久米の歌の性質はこの意味をもつてゐる。ねぎらひの約束である。久米歌は大伴家に伝承せられた歌である。

正確に云へば大伴家の物語の中から脱落した宮廷詞である。大久米と大伴とは別であるものを、古事記に同じにしてゐる。これは大伴家の祖先は道臣であるが、大久米は軍の為の魂で、大伴家に代々伝つた武力の魂である。この物語の中にあつた歌が大伴の部下の久米部、佐伯部、大伴の奴隷である。これ等の部民が歌ふものが久米歌である。即ち軍をする部族が久米と広義に呼ばれた。この歌が断言（片カ）化して宮廷詞になつたが、これに伴うて、解釈があつたのである。

一面、宮廷詞を中心として日本の歴史を調べて行く事が出来る。この歌を歌ふと昔神武天皇が、大和へ入られた時、威力があつた。この部族はこの歌を以て邪気をふるつた。その為、軍にこの歌を歌ふと死からの悪い魂が去ると云ふ信仰があつた。大嘗祭の時に定つて久米歌を歌つた。天平勝宝元年に久米歌を歌つた。四年に大仏が出来、開眼式の時も久米の歌を歌ひ舞つてゐ

る。宴会の時は外から邪気がやつてくる。それを防ぐためである。大嘗祭の時に物部の武官が門に立つて弓を引く行事をする。これも外来の邪気を払ふためである。この意味である。

久米舞は結局武官と関係の深いものである。大伴は宮廷の御門と云ふ事である。即ち大とまべ（宮廷の御門の神）の名が大伴部と云ふ部曲の名になつて来る。久米歌以外にも音楽舞踊が魔性を払ふといふ信仰があつた為、これを払ふ武官が定まつた。この武官をもののふしと云ひ、主に邪気を払ふ音楽の方面を云ふ。平安朝の中頃はこの意味は不明になつて来る。

も一つ、久米歌に関連した伝がある。

又歌ひて曰く

えみしを一人百な人　人は云へども手むかひもせず

の歌の後に、

此皆承二密旨一而歌之非二敢自専者一也

これは大伴家の伝を書いてゐるのである。実は天皇の内命を受けて歌つたと称してゐる。

久米歌は大伴家の伝へでは神武天皇が歌はれたとしてゐるのである。かう云ふ考へはまだ外にもある。

凡諸御謡皆謂二来目歌一此的取二歌者一而名之也

歌のねとりをするものは、久米部の民であるから、この名をつけるのである、と云ふのである。歌の伝来を主張した。神武天皇元年は争乱の間である。元年の最も終のところに、

初天皇草二創天基一之日也大伴氏之遠祖道臣命、帥大来目部奉二承密策一、能以二諷歌倒語一掃二蕩妖気一、倒語之用始起二乎茲一

とあり、これは久米部のとりあつかつた歌をひつくるめての語である。これは即ち軍歌である。諷歌は暗示の歌である。後世残つた久米歌は沢山の中から宴会などに関連してゐた為に残つたものである。

斉明天皇六年十二月、

まひらくつのくれつれおさへたをらふくのりかりかみわた
とのりかみをのへたをらりくのりかりか甲子をわよとみを
のへたをらふくのりかりか

の歌は諷歌である。暗示の歌である。倒語は語の意味をさかさに使用したものである。

宴歌

大歌は誰の時に出来たか、誰によつて出来たか。大体にむらがある。生活力の強かつた人とか云ふ人にかたまつてゐる。これは叙事詞を語り伝へる事と真言の関係が離れて来た為である。昔の叙事詞は、宮廷のはもとより氏々のものが材料を交換し合つてゐた。

後には叙事詞の中から抒情部分が独立されて来る。叙事詞は何うなるかと云ふと、古事記の如きものを見ると、宮廷の歌うたひが歌ふ時に歌のもとをとく。或は事（物語）のもと（本縁）を説くとなつてゐる。即ち口の上での説明をするやうになると非常に自由な態度になつて来る。記紀を見ると、同じ歌の歌ひ違へたものであると思ふものが違つた天子の時代にとか、又は

違つた場合に出来たように伝へてゐる。日本武尊の御歌の、

大和は国のまほろば　たゝなづく青垣山　こもれる大和し
うるはし

この歌も日本武尊の死なれた時の歌らしいものが、紀には景行天皇が日向に遊ばれた時のやうになつてゐる。これは記紀共に国しぬびの歌となつてゐる。

同じ宮廷詞でありながら起源は違つた説明をされてゐる。宮廷の楽人の伝へが部曲民の伝へが違つてゐる。叙事詞と真言との関連が希薄になつた為である。

うたげ歌は多く雄略天皇にくつゝいてゐる。うたげの歌の最も古いものとせられてゐるものは恐らく大国主命と后の須世理媛との間に歌はれたものであらう。これを以て宴歌のはじめとしてゐる。

古事記の伝へでは神語（カミガタリ・カミゴト）と訓んでゐる。かみがたりは、やはり歌の一部分である。この歌が宴歌の一部分である。魂の怒りを鎮めて酒を飲むことである。

かく歌ひて即ちうきゆひして項かけりて今に至るまで鎮座す。此を神語と謂ふ。

これは日本宴歌の基礎を説いたものである。うきは盃のことで、ゆひは組になつて共用する。うきゆひは、ならびちのことである。ならびちはならびひきと云ふことである。うながけるは手を頸にかけ合ふことである。

これと似た形が雄略天皇の時にある。この天皇は極く感情が自由な方で、非常に怒り易い方である。この時代に酒盛りの歌が五つ出てゐる。ある時、天皇初瀬の百枝槻の下にまして豊明をきこしめされてゐた。伊勢国の三重の采女が大御盞をさゝげて奉つた時、槻の葉が落ちて浮かんだ。天皇はその采女を打ち伏せ御刀をその頸にさしあて斬られやうとした時にその采女が歌をうたつた。その歌の終りに、

ことの語りごともこをば

とある。これは天語歌である。三首の天語歌が出てゐる。同じ時に春日の袁杼比売に向つて天皇の作歌がある。

みなそゝぐ　臣のをとめ　ほだりとらすも　ほだりとり
かたくとらせ　したがたく　やがたくとらせ　ほだりとら
す子

これは宇岐歌なりと註がしてある。袁杼比売の献つた歌は、

やすみしし　吾大君の　朝戸には　いよりだたし　夕戸に
は　いよりたゝす　わきづきが　下の　板にもが　吾兄を

で志都歌也と註がある。

これは別の伝である。うき歌は盃をあげて歌ふ歌である。志都歌は鎮める調子の歌であるとの説（宣長説）があるが、これは魂の怒りを鎮める歌である。

雄略紀で見ると、酒を飲む時の歌に三様あるが、この他酒ほがひの歌がある。

怒りを鎮める志都歌系統のものと、宇岐歌と、志都歌系統の外に酒ほがひの歌の系統がある。酒ほがひは、酒を造るときによく作れるやうに祀りをする。酒は占ひのために作り、その良し悪しで占つたのである。この酒をかもす時に祝福の言葉を叙べ

る。これを酒ほがひの言葉と云ふ。この酒がよく出来れば旅に行つた人は無事に戻つて来る。病人は全快する。その時にその人が酒を飲むのである。

古事記の応神天皇の条を見ても、酒ほがひの歌が出て来る。残つてゐるものでは最も古いものである。古事記では酒楽之歌也とある。これで見ても、酒盛りの歌であると解釈してゐる。酒ほがひの歌は前後二度ある。占の効果がよく出来るやうにと祈るのが酒ほがひで、次のは宴会にその無事を祝するのが後の酒ほがひである。

来歴を唱へ、盃をあげ、怒りを鎮め、酒を飲むのが宴である。とよのあかりの歌と云ふのがある。

雄略天皇に酒盛りの歌が沢山附加してゐるのは、酒盛りが怒りを鎮める為である事を示すものである。志都歌系統が雄略天皇に附加して行つた。その為に後には志都歌と志都歌の返し歌の二種類になる。志都歌の返し歌は替へ文句である。

恋歌

をとめのい隠る岡を金すきも五百箇もがもすきはぬるもの

この歌は、「雄略天皇が丸邇のさつきの臣の女、袁杼比売をよばひに春日にいでませる時、をとめの逢へる道に幸行を見て岡辺に逃げ隠りき。」その時によまれたものであるが、この歌は萬葉の最初の長歌、

こもよ　みこもち　ふぐしもよ　みふぐしもち　この岡に
菜つます児　家告らへ　名告らさね　そらみつ　大和の国
は　おしなべて　吾こそ居れ　しきなべて　吾こそ坐せ
吾こそは告らめ　家をも　名をも

をかへたものである。古い伝へにこの伝があつて、他の伝へがまぎれ込んだのである。まだ萬葉と似た歌がある。巻一、巻二は記紀に見ゆる宮廷詞以後の宮廷詞を集めたものである。舒明天皇が大和の宇智野に狩せられた時に皇極天皇の使ひが天皇の歌を献つたのである。

天皇の宇智の野に遊猟したまへる時、中皇命の間人連老をして献らせたまふ歌

やすみしし　我が大王の　朝には　取り撫でたまひ　夕べには　い倚り立たしし　み執らしの　梓の弓の　長弭の音すなり　朝猟に　今立たすらし　夕猟に　今立たすらし　み執らしの　梓の弓の　長弭の音すなり（巻一の三）

反歌

たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野（同、四）

この狩場の歌も雄略天皇に、

やすみしし　吾大君の　朝戸には　いよりだたし　夕戸には　いよりたゝす　わきづきが　下の　板にもが　吾兄をがある。これと同じ歌である。雄略天皇は感情の純な人であるが、一方、又でたらめの人である。

恋の歌に二種ある。鎮魂の歌が一方にある。即ち戦に打ち勝つ為に、相手の魂を屈服させる為に歌ふ。志都歌は、これより出たものである。一族の間の結婚は問題にならなかつた。異族の

結婚、即ち違ふ村に結婚を申し込む時には戦がある。即ち魂の戦である。相手の魂を征服すれば結婚は成立する。相手は村の主の娘か妹である。相手の女は即ち神に仕へてゐる巫女である。それを征服するのには相手の村をも征服するのである。その為に恋愛の歌は皆戦争である。その戦ひは詞の戦争である。呪言の戦ひである。名告りはこれから出たものである。名告りは結婚の一部分である。自分の家筋、名前を云ひあげる。それに依つて相手の魂を屈服させる。よばひはこの声高く名告ることである。叙事詞の中の抒情部分即ち真言を以てした。それが新作の叙事詞をもつてするやうになる。最初は魂を征服する為に起つたのである。新作の改作を重ねて来る。勾大兄皇子と春日皇女との問答の歌がある。これも大国主の歌の焼直しである。これが恋愛の短歌まで変化する。

恋愛の歌のはじめは、

の歌が最初に唱へられたこと、思ふ。

志都歌は恋愛に使用せらる、時は妻の嫉妬心を鎮める。も一つは怒りを鎮める事である。

恋愛の怒りと普通の怒りと二つが同じく志都歌で和せられる。その為か、宴会の時に志都歌を歌ふ習慣が出来てきてゐる。恋歌と宴歌との関係が必要である。その問題を最も簡明に解釈するのが、

天語歌……恋歌になる。
神語歌　宴歌になる。

である。恋争ひは男と女の恋を成功する為の争ひで女を征服するか女に負けるかの問題である。

黄泉比良坂でことゞを渡された説明は恋愛の敗北である。仁徳天皇とその弟速総別王と女鳥王に恋をしかけて、仁徳天皇は失敗した。

男女の恋愛争ひが後には男同士の恋愛争ひ又は女同士の妻争ひとなる。女を手に入れることはその国土を征服することである。妻争ひは国争ひであつたのが、時代がすゝむとこの習俗を忘れて来る。恋争ひが男同士又は女同士の争ひになる。叙事詞の伝統で伝つたものは男女の恋争ひである。恋愛問題は沖縄に残有してゐる。祝女の生活には之がはつきり遺つてゐる。万葉集巻一に天智天皇が印南に行かれた時に作られた三山の歌がある。

高山波　雲根火雄男志等　耳梨与　相諍競伎　神代従　如此尓有良之　古昔母　然尓有許曽　虚蟬毛　嬬乎　相挌良思吉

普通は畝傍を女として解釈してゐるが、畝傍は男山である。香具山と耳梨山は女山である。となしてゐる。とにかく畝傍山は異性である。我国の恋愛の歌は三山を中心にしても少し考へねばならぬ。

記紀万葉の古い歌を分けて見ると、妻争ひの歌とよばひの歌とみね歌との三つである。

みね歌 ｛ みね歌
　　むろほぎ歌

よばひ歌

よばひをする時に本は文句が定つてゐたらう。最も古い伝への遺つてゐるものは、神武天皇が大久米の命と大和の高佐士野を通つてゐると嬢女が七人遊んでゐた。命が天皇に問ひかけた。

倭の高佐士野を七行く嬢女ども誰をしまかむ

伊須気余理比売が、前に立つてゐることを知りたまひて、天皇は、

かつがつもいやさきだてるえをしまかむ

大久米命、天皇の命をその伊須気余理比売に詔れる時に、その大久米命のさけるとめを見て、奇しと思ひて、

あめつゝ　ちどりましとゝ　などさけるとめ

と歌つたので、大久米命、

をとめに　たゞにあはむと　わがさけるとめ

このいれずみをしたのは、男が求婚した時に顔を隠した習慣が固定して、いれずみをするやうになつたと思はれる。目に入れ墨をする事は結婚する手段である。

この歌は神武天皇が伊須気余理比売を得られた時の大歌である。恐らく日本求婚の時に使用された歌であらう。五月の田植は神と処女とあふ時である。顔を隠す事が行はれ、後には白粉で目をつぶして了つた。妻よばひ歌が日本の歌の中に大分ある。これが色々な形に変化して来た。高志の国の沼河媛のところへ行つた二首の天語歌はよばひ歌であると思ふ。これは仁徳天皇のよばひ歌より新しいものであると思ふ。よばひ歌が又変化して来る。変化したものは仁徳天皇の失敗歌の如きものである。

八島国妻まけかねて……（勾大兄皇子）

……はしけくも　いまだいはずて　明けにけり　わぎも

（書紀　宣化帝と春日皇女との歌）

その歌は大国主命の歌の変化したものである。安閑天皇七年云々と云ふ文章がついてゐる。これは妻どひの時に真似して起つたものであらう。

万葉集巻十三の終りに異つた形をしたものになつて伝つてゐる。

隠口乃　長谷小國　夜延為　吾天皇寸与　奥床仁　母者睡
有　外床丹　父者寐有　起立者　母可知　出行者　父可知
野干玉之　夜者昶去奴　幾許雲　不念如　隠妻香聞

の歌がある。これからむろほぎの歌になつて行く。神武天皇のみね歌はむろほぎの歌である。

あしはらのしけしき小屋に菅たゝみいやさやしきてわが二人ねし

日向国諸県君の女、髪長比売を応神天皇がよびさげて、難波津にとまつた時にひつぎのみこ大雀の命が建内宿祢をして請はせて手に入れられた。その賜はる豊明きこしめしける日、天皇の御歌に答へて大雀命のよみたまへる。

道のしりこはだをとめを　神のごと　きこえしかども相枕まく

道のしりこはだをとめは　争はずねしくをしぞもうるはしみ思ふ

これはみね歌である。

ところが共寝をすることが出来ない時に歌ふ歌がある。この歌

は歌つて寝るやうにするのか、その寝られぬ時を去らしめる為か、わからぬ歌である。

おきつもは辺にはよれども　さねとこもあたはぬかもよ
浜つ千鳥よ

これは豊玉媛と彦火火出見命の歌である。同じ歌が日本武尊と美夜受比売との間にかはされてゐる。

ひさかたの天の香具山　利鎌にさ渡る杙　弱細（ヒワホソ）たわや腕を
枕かむとは吾はすれど　さ寝むとは吾は思へど　汝がけせ
るおすひのすそに　月立ちにけり

この歌があつて後に伝説が出来た。即ち長く女にあはないで日が経つたことだと云ふ歌である。「なが著せる襲のすそに」は序歌である。

その返歌に美夜受比売、

高光るひのみこ　やすみしゝ吾大君　あらたまの年が来経
れば　あらたまの月は来経往く　うべな〳〵君まちがたに
わがけせるおすひのすそに　月たゝなむよ

この様に共寝の出来ない歌がある。これは恋歌の中、一種、特別なものである。

はじめからあつた傾向が洗練されて出て来る。歌垣の洗練した技巧を教へるのは村々の叙事詞の影響がある。村々の叙事詞は神秘であるから自由に出来ないが、他から持つて来る乞食者の叙事詞が影響づけてゆく。乞食者の歌が次第に崩れて行つた。それの最も証拠立て得る団体は天語部である（海語）。あまは漂泊して歩くもので、くゞつのもとになつたものである。賢いものは平安朝から定住しかけて来た。

大国主の歌は皆海部の歌つて歩いた歌である。この海語の歌つて歩いたものの数は沢山あるが、軽皇子が軽太郎女と妻どひせられた時の物語は海語であると思ふが、名前が色々異つて伝つてゐる。その代表的の名は天田ふりである。その他に沢山ある。「ひなぶり」「しらげうた」「みやびとぶり」「よみうた」など云ふ区別が天田ふりの中にある。天田ぶりはその語源は「天田の軽」といふのがあるからである。この幾多の「ふり」は伝が異つてゐるからである。この物語は恐らく軽部の物語であらう。姓氏録は間違つた伝へをなしてゐる。恐らく軽部は幾多もあるが、軽太子の御名代部であらう。その軽部の伝へたものが、天語の方へ入つて行つたものであらうと思ふ。

このあはれな物語が、乞食者によつて持つてまはられた。軽部の歌がまた変化して伝つてゐる。古事記の軽の太子の、

こもりくの　長谷の川の　上つ瀬に　いくひを打ち　下つ
瀬に　まくひを打ち　いくひには　鏡をかけ　まくひには
またまをかけ　真玉なす　吾が思ふ妹　鏡なす　吾が思ふ
妻　在りと云はゞこそよ　家にもゆかめ　国をもしぬばめ

と云ふ歌がある。これを読歌と云ふのである。よみうたはことほぎの歌である。

この歌は天語がことほぎをして歩いた時、ことほむとしてよみあげた歌である。万葉巻十三に、

こもりくの　はつせのかはの　かみつせに　いぐひをうち
しもつせに　まぐひをうち　いぐひにはかゞみをかけ　ま

ぐひには　またまをかけ　またまなす　あがもふいもゝ
かゞみなす　わがもふ妹もありといはゞこそ　くにゝも
いへにもゆかめ　たれゆゑかゆかむ

と何らのことはりなしに出してゐる。それに反歌がある。

としわたるまでにも人はありとふを　いつのひまぞもわが
こひにける

よのなかをうしとおもひていへでせし　われやなににかか
へりてならむ

歌ひなれてゐる中、物足りないところから反歌をつけたのである。巻十三挽歌に、

こもりくの　はつせのかははの　かみつせにうをやつかづ
け　しもつせにうをやつかづけ　かみつせのあゆをくはし
め　しもつせのあゆをくはしめ　くはしめにあゆをあたら
し　なぐるさの　とほざかりゐて　おもふそら　やすから
なくに　なげくそら　やすからなくに　きぬこそは　それ
やれぬれば　ぬひつつも　またもあふといへ　たまこそは
をのたへぬれば　くくりつゝ　またもあふといへ　またも
あはぬものは　いもにしありけり

と云ふのがある。これはより近代的ならしめて来てゐる。これが日本の情史の最初である。

軽部、藤原部、春日部に就いて述べよう。

神祇官に仕へてゐる卜部が天馳使（海部馳使丁）になつた。これが陰陽道に入つた。根本は天馳使である。

天語連は宮廷語部第三期に属するものである。

中臣女に就いては先輩も考へなかつた。

猿女（女）　中臣女（女）　天語連（男）

語部は表面女を主としてゐた。公職にあるものは女が主であつた。

中臣女

中臣女の記録は極く少ないが、中臣女は禊をする際に天皇の御体に近寄るものである。夏冬の大祓の時、群臣の為の祓へで天皇は節折（ヨヲリ）をする。節折は竹の節を折ると云ふことで、内侍が天皇の御体の丈を計る。この竹に生魂のけがれがつく。この節折の行事は陰陽道の方から入つたものと思ふ。

荒世服（ミノ）　和世服

の二種類の服を祓ふ。宮廷の行事はこの二通りのものを行ふが、神道・陰陽道の二つが入つてゐる。荒世服・和世服は天皇の御代の代表であつて、外来魂を附着する為で、その為に祓へをするのである。その時に内侍が節折をするが、その最も必要なものは中臣女である。この祓への行事に奉仕したのは、中臣女である。中臣氏の女であつたらうが、後に転化したかも知れぬ。

大祓への御儀に中臣が何代仕へたか。

寿詞は、天皇の生命を祝福すること。自己の家伝承の魂を天皇に奉呈することの時の唱へ言である。

寿詞にも色々の種類がある。この中、重大に思はれてゐるものは天つ神の寿詞。普通はこれを中臣（中臣天神）寿詞と称してゐる。天神の寿詞はこれだけだらうと云ふ者もあり、又否とい

ふ人もある。反正天皇の御生れになつた時に、産湯をば瑞井でなされた。瑞井の側に立つて丹比色鳴（タヂヒノシコメ）が天つ神の祝詞を申し上げたとなつてゐる。その時に水の中にたぢひの花が散つた為にこの姓を賜つたと伝説されてゐる。天つ神の寿詞は中臣氏のみならず丹比氏も使つた。丹比の寿詞は皇子に産湯を使ふ時に唱へられた。

中臣には中臣寿詞あり、丹比には丹比の寿詞があつた。丹比道主の家には丹比の寿詞があつた様である。後には中臣の勢力ありし為にその寿詞のみが行はれた。中臣寿詞は大嘗祭にのみ使用される。大嘗祭或は即位式の時にも奏し、或は朝賀の時にも天つ神の寿詞を奏してゐることがある。私はこの三つの式が同じものであつたと思ふ。三つになつたのはその一つ一つを分けたものであらう。即ち此と別々に持つてゐた。寿詞を奏したのである。丹比はいたどりのことで、一種のまじなひのものであつた。その皇子の歯の美しかつた為に丹比瑞歯別命と申してゐる。その時に色鳴（伝説のあるは新撰姓氏録）が寿詞を奏した。井戸は先づ水の神が水を使つて見せて、後貴い人が入り、次に群臣が入る。祓への時の節折はこの習慣である。賀茂祭には賀茂別雷神が毎年生れられる。最初生れられた時の式が幾度も復演せられる。これは根本の祭の儀式である。別雷の神が賀茂川の水で産湯を使つた形をし、その後、貴い方が入る。即ち賀茂祭の上卿が出かけて行く。この故に京都の庶民に賀茂の水を使用する事が許される。その長い生活から賀茂の水は禊をする水となつてゐる。糺川原は陰陽道の本場となつた。

反正天皇の禊の折、水の中では御子を取り上げてゐる大湯坐（ユエ）、若湯坐とある。大湯坐は正式、若湯坐は副で、湯坐はとりあげ婆さんである。この二つはもとは水の中の女神で、始めて生れられた皇子を取り上げ申し上げる。その後に湯を飲ませる。湯母乳を飲ませる。乳母（チオモ）、飯嚼（イヒガミ）と云ふものがある。それらが一続きに奉仕する。昔では六日目である。後には七日目になつた。産養ひと云ふ。大湯坐、若湯坐は二人であるが、後の事は一人であるらしい。子が生れるとそれを水の中につける。その時にその後を務める女はその後日をつとめた部から出た。つまり丹比女とでも云ふべきものが天つ神の寿詞を唱へてゐる間に、この丹比女が水中から出て取り上げ、その皇子に仕へたものである。

子守は子を育てるために他処の氏から頼まれて来てゐる人である。女の方では子守乳母である。男の方では子が育てあげると乳母子守等がその妻となる。神を育てあげた人はその神の妻となる信仰があつた。丹比氏から出た丹比女は后の如き形をしてゐた。その女の出た家が壬生である。古くはニブとも訓んだ。乳部（ニブ）とも書いた。皇子に産湯をつかはされたものである。丹比の壬生が出来ると、その為に一つの村が出来る。丹比壬生部はそれである。今日、壬生部あるはそれである。丹比壬生の頭は丹比宿禰である。日本紀を書いた頃の考へからしてゆくと、反正天皇の為に丹比の壬生部を作つて天皇の私有財産にしたのであると解釈してゐる。新しく生れた皇子に対して、女は水の中で世話し、男は天つ神寿詞を唱へる。御子代部、御名代部と云

ふものがあつた。村職業団体にある人の名、地名を冠せて伝へた。これは実は壬生部の変形である。男の方は名代部で、女の方は子代部である。壬生部から名代部に一貫して行く考へはその村の最初の建設者である。その建設者以来その建設者の来歴を伝へるものである。それが系図の如きものになつた。それから御名代部になつた。壬生部の仕事はもつと漠然としたものである。取り上げ婆について来た伝説が伝つたものがこの壬生部の伝へである。天つ神の寿詞がその村の記念的行事によみあげられる。その事実を古代論理によつて復演する。さうして事実を観じてゐるのである。その伝へが事実でなくても語り伝へる人によつて、多少の変化して来る。天つ神の寿詞は他の家の寿詞と異なるが、その家の特色を除けば、その形は同じであつた。即ち一つの形を持つてゐて、そこに特色があつた。けれども、それを唱へる家々は特色を考へてゐた。その根本は同じものであつたらうけれども、その奉仕する際に異つて行く。その為に家々の寿詞は独立しようとする。その各々に於て唱へられた寿詞がその部曲の特色ある寿詞と考へられてゆく。宣化天皇の曽孫多治比古王が生れた時の伝説は、やはり多治比の花の話がある。中臣寿詞は飲料水の事ばかり云つてゐるが、これは取り上げ申す際に於る取り上げの言葉である。即ち産湯をつかはしてゐる際に於て中臣氏によつて唱へられてゐるのが、その詞章である。天皇が崩御になると、次の御代になる間に空間がある。崩御から初春になるまで日継の御子が喪にこもつてをられる。喪はからだにつけてゐるものを云ひ、実は無い事を他に知らす形である。空虚を示す形である。

大きな喪をかぶられてゐられる間が長い。その喪から出られるのが誕生である。これがみあれである。御現れである。現れになるのが誕生である。皇子として生れた時に産湯をし天皇となる。喪明けに又誕生する。後に又壬生部がこの時にお世話申すのである。この誕生に関する仕事が中臣の専門となつた。天皇としての誕生にあづかるのが中臣であると云ふので、中臣氏が勢力を持つて来たのである。即ち天皇としての誕生にあづかるのが中臣氏で、その時にお世話をする中臣の女の仕事が即ち中臣女の仕事である。

佐保媛が兄と城の中で死ぬ時に、垂仁天皇は、

　　なが結ひかためしみづのをひもは誰かもとかむ

と申された。湯にのこれる時、天の羽衣をつけられた天皇が湯を召される時にみづの小紐を解く人がある。その人が天皇の最も近くに侍る人である。係りの人が天皇の妻になつて了ふ。飛鳥の都の中頃まで、天皇の后は水に関係のある女ばかりである。湯殿の関係である。湯殿でみづの小紐をといて湯をおすゝめする人は即ち一定してゐたのである。それが后である。佐保媛の推薦されたのは丹波造主娘である。丹波の道主は伊勢外宮の神主である。伊勢の外宮は水の神の本もとである。

中臣女はこの様な関係から天皇に奉仕した。天皇となる資格を附与せられる第二の誕生に際し、沐浴の世話をされたものが中臣女である。中臣女の部曲は天皇の沐浴の際に唱へた寿詞を伝へしめたものである。中臣志斐連の志斐語りは即ち中臣女と天

皇との関係をよく現はしてゐるものである。志斐も中臣の語部の一種である。

兵主部

兵主部といふ部曲の名はなく、兵主と云ふ家はある。古くはつはものぬしと訓んでゐる。疑ひもなく、兵主部（ヘウスベ）である。兵主と云ふ神がある。その名の起原は不明であるが、兵主神の名があつた事は想像出来る。

兵主は穴師部の一部分である。穴師は三輪山の上にある穴師山の神主、ならびにそれに使はれてゐるものを穴師部と云ふ。穴師の神主、それに附属した穴師の神主、穴師部が兵主部と同じものか、穴師部の一部分らしい。穴師の神の分布は大和宮廷の伝へでは穴師は和泉の国の穴師が最も古いらしい。和泉の国府にあつたものが大和へ移つた。穴師の神主、穴師の神人が諸国へ布教した。穴師は祓へを主とする団体である。

兵主といふ名の見えてくるのは大和の兵主神社、播磨の国に因楯兵主社があり、近江に移つて居る。それから磐代、奥州方面へ入つてゐる。伊達氏は因楯兵主に奉仕してゐる神人の役である。それが幾度も布教に出てゐる。ほかひの話をしてゐる。その間に定住するものが出て来る。その中の最も名をあげたのが伊達氏である。伊達兵主、因楯兵主は大和の穴師の神の宣伝をしたものである。日本の古いやかましく宣伝せられた潔をしたとは考へられぬ。穴師兵主が宣伝して歩いた。兵主はたゞ一つの資料の手がかりがある。垂仁天皇の后に日葉酢媛がある。佐保媛が推した丹波道主の娘の一人である。（尊（ムチ）とあるのは水の動きに関係する名である。）日本紀にはいつをとめ、記にはふたをとめとある。主役が一人で附属が沢山ある。兄媛弟媛が、兄媛は一人、弟媛は幾人でもよいのである。日葉酢媛は水神に仕へた家の女である。兵主はこの音をうつしたものである。ヒヤス、ヒヤウス。

皇后が何故定まるか（私部参照）。天皇の潔の折に紐解く女である。日葉酢媛が佐保媛から推薦されたのは、□をさせる人をすゝめた話に過ぎない。兄媛が日葉酢媛である。日葉酢は潔に関係ある詞である。兵主が段々変化して河童をひやうすべと云ふやうになる。九州一円にてはひやうすべと云ふ。何故に河童を然様呼ぶか？　禊を司る神、神人の系統の同じと思ふものをあげると、和泉の穴師部、大和の穴師、阿蘇のいなさ、出雲国のわなさ、近江の穴師、この五者が大体同一系統と見られる。南海道の瀬戸内海に面した阿波、和泉、摂津と穴師の団体で、これは大和、丹波のいなさ、出雲のわなさで山の手へ入つたものである。阿波国のわなさおほその社が古く見えてゐるが、疑うてゐる。阿波からも出てゐる。瀬戸内海の海岸をとりまいた禊の神が居た。阿波国の禊の神は阿波さおほそである。丹後の国へゆくと、わなさおきな、わなさおむなの二人で、出雲国はあはきへわなさひこと云ふ名になつてゐる。阿波の国から長く住みついたと云ふことである。先づ阿波から来たものと推測出来る。これに一つ困ることが出来る。丹波、丹後に於けるわなさおむな、わなさおきなの話は伊勢の外宮に関する神である。

わなさの神人の名前で、同時にあなしと同じ語であると思ふ。神人の名前でそれが神を持つて歩いた。阿波の国では大げつひめである。その神を持つて歩いた神人の名ならしい。この団体が神を持つて歩きながら物語を撒布した。この物語はわなさおきながしたと云ふ事になる。大げつひめは外宮の神である。記紀を見ても三つ違つた神が出て来て、誰の□にもなつてゐる。食物の魂である。食物の魂を持つてゐるとその国を支配しうるのである。おほげつひめは須佐之男命に殺される。丹波の物語でも、このわなさの媛は行き倒れになつて死んでゐる。豊宇賀能女の女と云ふ神になつてゐる。死んで食物の神になつてゐる。食物の神は一度死ぬものである。阿波の大げつひめと同じものである。出雲の方面では、あはきへわなさひこの話になつてゐて、阿波から出雲に来て勢力を得た。出雲に来てから、みづは、みぬはの神の名になつてゐる。何れも水の神である。今のはわなさの系統である。穴師の系統は播磨風土記に穴師の神人が布教して歩いてゐた事が見えてゐる。和泉、大和へ持つて歩いた。その他禊の神は沢山ある。筑前の宗像の三神は禊の神である。これが兵主と合体した。水の神である女の神が沢山ある。これが流行してゐる神人に合体せられる。禊の神で目につくのは山の神である事が多い。大和の穴師の神は山の神であり、丹波の国の道主の奉仕してゐる神は山の池の神である。比治山真名井の神である。近江の三上山の神も山の泉の神である。こゝに日本信仰の中に混乱がある。水の近いところで禊をしてゐたのが、山の手へ入ると清水、池の水を使用する。この為に水神が山神になつて行く一方、山の神が海岸地方へ宣伝に出る。

穴師についても一つ大切な事は、穴師の山の神人（神楽歌古今集）、

　まきむくの穴師の山の山人と　人も見るがに山かづらせよ

と云ふ歌がある。神楽の採物の歌の一つである。穴師山の山人は平安朝のもので見ると、山人が宮廷、平野祭の祭りに出て来る。もとは本当の山人がやつて来たのであらう。その歌の出来た頃は山人の出て来たのではない事を証明したのである。山人の服装をして歌つたものである。大和に宮廷があつた為に穴師山の山人が出て来る。奈良に移ると添上郡の山村（ヤマフレ）にゐた山人は村から隔離されて住んでゐる。平安朝のものから見ると、山人は鎮魂をするらしい。

穴師山人の一種が日本の鎮魂の神楽の一種を司つてゐた。山人の持つて来たものが鎮魂のしるしである。水のとぼしい所に居ると次第に鎮魂の方面へ進んで行つた。こゝに鎮魂の舞が出て来る。山人の舞、山姥の舞は何れも禊の変化したものであつて、鎮魂の法式である。穴師山は三輪山の上にある。三輪山と穴師山との関係が移されて、ひえの山から出て来る様になつた。日吉神社についたものと、まつのをの社についたものとあつた。三輪山の上に穴師山のあるのは三輪山は大和朝廷に敵意を含んでゐる神である。それを圧迫する為に穴師山が三輪山の上にゐた。神の名は何れも違つてゐるが、賀茂と云ふ神は出雲系統の神である。あぢすきたかひこねが出て来ねば出雲ではわきいかづちとなつてゐる。日吉の神社の山人が賀茂の社を抑えてゐる。

日吉、住吉をヒエ、スミノエと訓むのはヒエ、スミノエ何れも自由であつた。ヒエ、ヒヤウズ何れも同じであつた。賀茂が禊の神となり、日吉が鎮魂の神となる如く関係が易る。穴師の神部のした仕事の分れを考へると、

禊を行ふ。
鎮魂を行ふ。
神楽を行ふ。
市を守る。（守は山の中の斎場）

つまり鎮魂と禊の二つに分れる。この穴師の兵主部の神の代作した神が、後に河童になるものである。わなさは女の神である。大げつひめととようかのめの如きものである。穴師神人の持つて廻つたものは男の神である。女の神といふのは女の神を通しても一つ神がある。女の神になつてゐるのは巫女である。巫女自体が神である。大げつひめ、とようかのめの役に又一つの神がある。小さな神が出て来る。それを育てる女があつて、成育の後に神の子を生む話がある。比治山の真名井の神は沢山の天女が禊をしてゐた。つまり巫女である。大げつひめも巫女の名であるに相違ない。水の中で取り上げた小さな神があつた。それが天若日子である。この神が後には蔭にかくれ、巫女が女の神となるのである。兵主部と関係の深い天子の神がある。天彦―天児―尼子になる。天児を育ててゐるのがうばごぜである。天児から兵主部の話が出てゐる。九州の河童を祀る水辺の祭りでは、天児を主としてまつる尊い神をうばがゐて育てた話から安徳天皇を祀つてあるところがそれである。

わなさ系統では男の方が主である。天児の信仰では姥の方が主になつてゐる。水の神を祀るのは女が主であるから、姥の方が主になつてゐる。かうしてひやうすべと河童とが同じものであることがわかる。河童の一つの性質には天児があると同時に、猿、すつぽんの分子がある。併し本質は天児の性質である。天児とひやうすべとが分れて来て、ひやうすべが河童の名になる。河童の中で最も明らかな要素は猿である。日吉の神と関係が深い。日吉には手代の猿がある。手代で神の手そのものとなつて働く猿と云ふ事である。天子の代りとなつて働くものが手代部である。「かみのみてもちひくことに」（古事記）は天皇の代りとして弾く琴の意味である。「すめらわがうづのみてもち」（万葉集）も天子の代りになつてと云ふ意味である。この日吉の手代が猿であつた。猿部屋はその手代の猿を育てて居た。この手代の猿が水の神と関係がある。猿と河童とは仲が悪いと云ふが、猿は水の精で、水を見せると水にかへると云ふ日吉の信仰があつた。日吉の禊に猿を使つたのが家の祓に猿を使つた。それが馬屋の祓へに猿を使つた。馬の腹掛けの大津東町は穴師の部落であつた。猿が水神の手代である。河童と敵同士ではなく猿と同様である。後には河童をば合理的に解釈して行く故に奇物怪物になつて了ふ。禊をさせる人と受ける人との混乱は信仰上変つて来る。河童の髪の形は天児の形である。河童が女になつてゐる事がある。美濃・尾張辺にあつた。美濃にやなぎの橋に乳母が出て来た。西鶴の諸国咄に「おのが命のはやづかひ」といふところに出て来る話のもとは「久だま池」の池の話になる。

これが水から出て来る女の話で、女の河童である。女河童の話は乳母（ウブ）の信仰と同じで、水の中で若児を育てる女と同じで、丹生部と同じことである。水から出て来る怪物は皆水の中で禊を行ふ人で、行はれる人と混乱してゐる。男がされる人で、女が与へる人である。神の中に分らぬ神がある。神母聖母である。神母は四国に居る。聖母は九州にあるものである。聖母の根本は薩摩の野間権現である。神母は四国の吉野川の両域の山地に拡がつてゐる。いげの神である。いげは池である。堰の事で池は堤である。いけは方言より見ると神聖な水を包んであるところを云ふ。吉野川の山地ではいげのかみと称する水のあるところ、山の水の湧ひてゐるところを主としてゐる。鍛冶屋がいげの神を祀つてゐる。

私部の物語

私部は皇后に属する部曲の民である。御子代の民の一部分が私部と総称せられた。御子代の民の中、皇后の御名前、氏、家、居られた場所の名を冠して独立したものもあるが、私部の総称をもつてゐるものである。私部の起原は御名代・御子代より始まる。子が無いから村を作り、或は団体を作り、それにその家名、宮殿のあつたところの名を附する。仁徳天皇の后の磐姫は葛城氏だから葛城部を置く。允恭天皇の衣通姫の為に藤原部が出来てゐる。それは大和の藤原に居られた為である事と思ふ。天皇の后の定まる時に出来るものが私部物語で同時に御子代の物語である。近松の丹波与作にお湯殿の子しらべの姫君と云ふ事がある。後世、湯女は卑しいものである。お湯殿の子はさほど卑しんでゐない。宮中の御殿にも色々の行事があつた。お湯殿の日記は即ちこの事を記載したものである。天皇が大嘗祭の時に、お湯に入らるゝ事だけ語る。天皇は湯へ入らるゝ時に三つ衣を替へられる。天の羽衣で代表されてゐる。これは浴衣だと云ふが、下帯だと思ふ。湯の中でお解きになる三通りの儀式がある。廻立殿の儀式も三通りになつてゐる。それを解く役を奉仕する人がある。それが普通、内侍である。その間の儀式が分らない。お湯殿の中の言行を記載しておく。天皇は湯を浴びる時は神聖者である。昔は隣の室に音聞き役がゐた。御湯殿の日記もこの音聞役の記録であらう。

お湯に入られる時に天皇の羽衣をとく役の人が后のはじめである。天皇が、誕生する時と沐浴する時は同じである。上代の人間は汚い生活をしてゐた為に、禊の効果が著しく思はれた。湯は水である。みづ、ゆは、物忌みのかゝつた用水を云ふことである。みづは物を讃美する語である。その形容詞のつく本体がなくなつてゐる。生れた時と初春の沐浴は同じ意味である。禊は新しい神になり、新しい神が来る時に禊をしてゐた。祓へとは根本的に相違があるが後に附いて了つた。風呂は一種の奴隷階級より起つたものである。戦国の失意の武士が風呂を炊いてゐる。

古代の上流階級は湯に入る事が少なかつた。下紐は褌ではない。一部をくゝり、そのくゝりがある人以外に知る事が出来ないところがある。褌の後にみつがある。その辺が褌の結び目で、家々

によつて秘伝がある。あはをは伊勢物語に出て来る。

玉の緒をあわをによりてむすべれば　絶えての後もあはむとぞ思ふ（三十四段）

これである。水に関係ありさうな結び方である。女が褌の結び目に印をつけておく。結び目につけられた以上は性慾生活を開放する事は出来ない。この結び目をとくのは湯の中である。解くとは性慾が開放される。羽衣に手をふれる人は水の神の娘の形である。須佐之男、大国主の系統は、水に関係ある人が多い。沢山団体を為した氏族が居たが、出雲人が最も有力で、天皇に奉仕することが近かつた。その為に出雲人が出て来て、湯側の奉仕を務めた。出雲人のするのが原則だと云ふものが出て来たのである。それが記紀に見える系統で、后になる人の系統だと云ふ事を示してゐる。垂仁天皇、景行天皇までは后は多く水の神である。つまり水の神の娘になつてゐる。木花咲耶姫は山の神の娘である。大山祇神が水神であるのは水の神と山の神とはもと同一であつた。日本紀一書ににゝぎがかさゝの峠を歩かれた時、波の穂に居た姉妹の神の話がある。水の神が織女である印象が残つた。木花咲耶姫の話は書に書かれた最初の人である。兄媛は一人で弟媛は沢山ある（兄弟二人とするのは垂仁記で、日本紀には弟媛は沢山ゐる）。時代がかはるとその処女が水の神の娘といふ考へになる。豊玉媛は海神の娘で、妹には玉依媛がある。

此後になると、后はつきつめて行くと水の神の娘といふ型になつてゐる。皇后陛下のすゝめる家は道主の家（道主の尊（ムチ））である。日葉酢媛は丹波の道主の娘である。垂仁天皇の家の佐保媛が死なれた時に天皇は戦争で、物忌みをしてゐる。その物忌みをとく人が無い。「ながかためしみづの小紐は誰かもとかむ」と佐保媛に問ひかけられた。後の国学者は次の皇后の選定を問はれたと考へてゐるが、事は紐を結ぶ役が后の後である。この解き方を知つてゐる人は誰かと問はれた。その時に丹波の道主の家の娘が清きおほみたからだから使へと云つてゐる。日本紀には五人、古事記には二人（見方によつては三人とも見られる）と見えてゐる。正式の媛が兄媛で、候補者が沢山ある。徳川時代も結婚に一人つけてある。この添者がをとひめの習慣である。丹波道主の娘、日葉酢媛が兵主と関係あると思ふ。日本紀では三人返された。古事記では弟媛を返された。即ちこの事は、神聖行事が変つて来た為である。木花咲耶媛は弟媛である。磐長媛は兄媛で返された話がある。顔によつて選ぶのは後世に、転化して来た形である。ともかく水神の娘が沐浴の紐を解く。水の神の娘は一度水へもぐつて出て来るものであると思ふ。海人のかづきは伝統的信仰から出たものと思ふ。

神になると神婚が行はれる。世が進むと子と親との関係になる。父と子とが誕生する。子の誕生と親の毎年の誕生である。天子は毎年誕生するものである。毎年の誕生に奉仕する人と、子の誕生に奉仕する人とが混乱して来る。湯坐である。湯坐の職業をする人が妻になるのである。大湯坐、若湯坐が選定される。大湯坐の方は后となり、若湯坐は子供の守をして生長させ、後にはその妻となる。大碓命や仁徳天皇が父の后を奪つたのは、

湯坐の信仰が乱れてゐるからである。いいかみがまゝである。をもは乳母で同時に母である。母親の事を古はをもと云ふ。をもはうばである。母親は湯坐であつたり、をもであつたりする。をもは乳母である。万葉に、

みどり子の為こそをもは求むといへ　乳飲めや君がをも求むらむ（巻十二の二九二五）

をもは乳母でまゝも後には乳母である。まゝは固形物で飯を噛んで食べさせる役がいいかみで、まゝの後日である。乳を飲ませるのがをもである。世が進むと、おもとまゝと変つて来る。をもは原則的に云ふと乳母。めのととなつて居るのは、男に仕へてゐる世話役で母を育てる役はまゝである。乳母は実際には男に所属するものである。まゝが後添ひになる。乳母であり、同時に継母である。

平安朝時代にはこのまゝの地位が確定してゐなかつた為に継母子型は出来てゐなかつた。もとはまゝは固形物を食べさせるものであつたのが、平安朝頃にはまゝが女子につくようになつた。平安朝から鎌倉へ来ると、継母は男の継子には好意を持つてゐる。継男子に惚れ、継子に反抗された為に、敵意を含んでゐる形で、空穂の伝説はそれである。平安朝時代から継娘をいぢめてゐる。

系図は信仰の上の系図である為に、一代の人が又系図の上に子が名を襲ふ形が沢山ある。

水の神の姫が出て、湯側の行事に奉仕するのは出雲人の仕事と見てゐた。その中著しいのは藤原氏である。ふぢは一種の若返り、よみがへりに関係があると思ふ。もとふぢ原氏は、飲料水にあづかつてゐた。天皇の魂を入れる飲料水を奉る役であつた。それが水の中から出る湯をつかはす役と混合して来る。中臣が藤原となつたのは、飲料水をつとめる役に関連したものであると思ふ。万葉巻二に天武天皇と藤原夫人との問答歌がある。

天皇賜藤原夫人御歌一首

わが里に大雪ふれり　大原の古りにし里にふらまくは後にちりけむ　（一〇三）

わが岡のおかみにいひてふらせたるゆきのくだけし　そこは藤原夫人が何か水の神の信仰を司つてゐたこゝろが見える。（一〇四　藤原夫人奉和歌一首）

おかみは蛇である。

その前に藤原部の出来た始の衣通媛は後の藤原の地に居た伝説がある。藤原は井戸の信仰で禊の信仰である。衣通媛はちぬの宮にうつされた。正月のほんだはらは名のりそと云つた。名のりそは衣通媛と関係が深い。

とこしへに君もあへやも　いさなとり海のたまものよるときどきを

と衣通媛が歌を作つてゐる。禊に関係したものである事が判る。平安朝の末に和歌の三神がある。衣通媛は歌の神の一人である。これは和歌浦に関係してゐた為に、和歌の神となつた。和歌浦は禊の神として藤原の神を祀つた。中臣が藤原と称したのは何か意味がある。禊の家に藤原といふ家があつた為に、中臣がそれをとなへたもので、何か根本的の事情があつたものと思ふ。

藤原から皇后が何故に出たか。それは、飛鳥の頃からその素地を作つて行つた。その完全な水の神の仕事を奪つてしまつたのは、平安朝で信仰を失つてゐた。

中臣氏には中臣女がある。内侍所の役を中臣女がした。中臣女のもとの形はよくわかる。聖武天皇の皇后光明皇后に関係した話がある。光明皇后に関した事は病人に薬湯を施与なされた。最後に来た癩患者を洗つたらば如来様の様になつたと云ふのである。これは因縁である藤原の伝説の変形である。

藤原の姓は自由であつた。不比等の一派が藤原を称して栄へた。日本紀では藤原の姓はそれ以前に他家にあつた。即ち藤原部の部曲を宰領する家である。藤原部の起源については、衣通媛の話がある。それを起源としてゐる。名高い後の藤原を見ると、母方が藤原で、天皇の御子が臣下になるときに母方の藤原を称したもの、藤原に養はれる事になつたもの、もとあつた藤原の三つがある。最初に雑然と藤原部があつた。藤原部を統一する権利を鎌足に与へられた。藤原部は禊をする部曲である。結局、「淵」といふ名に関係があるものと思ふ。禊をするところが渕といふ地形であるからである。その地を藤井と云ひ、その場所を藤原と云ふ風になつてゐる。在来の衣通媛の系統だと称してゐる藤原は、葛原部となつてゐる。藤原の所属と葛原の所属とに分けたのである。藤原氏の旧いのと新しいのと分れるのは天智・天武頃である。皇族が藤原姓を賜つてゐるのは、天智天皇の時に二度ある。従来の中臣女が天皇の禊を奉仕してゐた。その仕事が后になる。その為に中臣部の人が皇后に上る事になつた。中臣部の仕事と皇后にあがる家筋の仕事とは別であつたらうと思ふ。皇后に上る家の名を私部（キサイベ・キサイチベ）と云ふ。私部、私市部等書いてゐる。

大私「市」部

キサイチのチが不明である。私市、大私部の起りは不明であるが、開化天皇の皇子日子坐王、彦坐王が起りになつてゐる。丹比氏等と同じ祖先である。さらに探つて行くと、丹波の国（今の丹後）丹波道主尊（ムチ）の祖先も日子坐王である。日子坐王は水に関係ある人である。日子坐の王の異名かと思はれる彦湯産隅（ヒコユムスミ）命と云ふ名がある。湯によつて物を産出する神と云ふ事である。大私市部が殆んど全国に伝つてゐる。その祖先が一定して云はれてゐない。后が出る時に大私部が出来るものである。大私部が出来る時には最初の伝へが一つになつて了ふ。壬生部は皇子によつて違ふが、皆同じ物語を語る。御子が沢山ある為に何氏の壬生部と称してゐるが、大私部はこの区別をしなかつた為に日子坐王よりはじまつてゐる事を説くのみである。私市部は日子坐王の子孫であると称してゐる。即ち宰領する家がなくなつたが為で、たゞ伝承によつて存立するのである。

大私部の起りは丹波である。丹波道主尊の後が、丹後の国に居て水神の仕事を奉仕してゐた。この家から或は別れから皇后が出てゐる。も一つ前の形は出雲人から皇后が出た。後に丹波道主の家から出た丹後の私市部が大私部のはじまりであると考へてゐる。大私部の大をとつて私市部と云ひ、私部と云ふ。大抵、

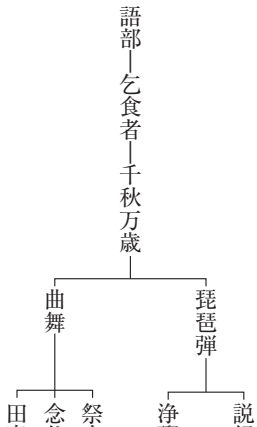
丹後道主の家では、日子坐の王を最初にとく。その伝承を語伝へるものが丹後の伝承と同一になつてしまふ。大后を出すのは必ずしも出雲の国造、丹後道主の家から出たとのみではないが、私部が出ると丹後氏の系統のものになつて了ふ。后の本当の家筋は定つてゐて大私部を称するのである。

私は天皇に対して云ふ事で、天皇の所領に対して皇后のもつ所領は私である。その為に私部となる。天皇所有のあがた|に対して私部と云ふたものであらう。御子代部の一種である。それが後には御名代が盛んになつて御名を伝へてゆく。即ち大私「市」部が先にあつて後に私市部、私部が出来てきた。天皇に関連した壬生部、皇族に関連した壬生部に対してゐるものが私部である。

これを伝へたものが禊の話である。丹後風土記逸文に比沼山の真名井の話がある。天津娘子の話である。外宮の豊受大神宮が、この行倒れの天津娘子である。物語をとく、この物語を語る為にどんな方から出る娘も丹後道主の娘と云ふ事になる。昔の女は三十前後になると、床去りをして神に仕へねばならぬ。兄媛、弟媛より先に天皇におあひなされた佐保媛の弟媛を選んだのは后を更迭する話で、その時にこの物語を語つたのである。皇后が出雲人の形をとつたのがはじまりである。その為に出雲人の方面に水の女が沢山居る。それが拡がつて行つて丹波道主系統の話になつてくる。

比沼山を伊勢の大神宮で比治山と間違へた。これは鎌倉時代？であるやうに思はれる。わなさ翁が真名井の天女を一人つれ戻つた家が富み栄えると、天女を追ひ出した。天女は竹野郡の奈具の地で死んだ。

日本のこの歌の話を見ると、本地説の根本は大抵この神が死んでゐる。さうして更に偉い神になつてゐる。神の子が天から降つて来て、この土地で一度死んで又偉大な神に生れる。それが語部から乞食者の口に伝承せられ、それが千秋萬歳等になり、幸若になる。



もと〳〵ひよつと出て来たものではない。

貴種流離譚の形式が乞食者の歴史である。乞食者の語りには自分の旅行と貴種流離譚と一緒になつてゐる。本地ものの転生は仏教程ではない。もと日本の流離した神が、一度死んで又もとへ戻るといふものである。比治山の天女は死んで伊勢の外宮の神である。外宮の神は須佐之男や月夜見尊に殺されてゐる。食物の神は大抵殺されてゐる。この比治山の話は一部分わなさ|の神人が持つて歩いたものである。丹後の国ではわなさ命といつ

てゐるが、出雲では、あはきへわなさ命といふ神になつてゐる。この神人の持つて歩いた話が、この比治山の天女の物語である。土地に関する流動の自由は各国にその真名井を残したのである。丹波氏から又丹波氏の系統であるといふ形で皇后を入れる。その為に専ら出雲は後に問題にならなくなつて丹波道主尊の娘が出て来る。この八娘子は禊をする役である。日本神道の一番困るのは巫女と神と混同する事である。天照大神は巫女である。これは又巫女がついて来る。女に巫女は不必要であるが形式として必要として来る。宮廷伊勢大神宮に丹波道主尊の娘が、奉仕するには禊をする役である。宮中ではみづのおひもをとく役である。それが皇后になつて来る。真名井の話でも天の羽衣をかけて沐浴してゐた。天つ娘子は巫女である。八娘子の起原をとくものである。もとは七娘子といふのが本当である。兄媛が一人その他弟媛が沢山ゐると云ふ事である。真名井の話は天の羽衣のもとをといてゐる。これはみづのおひもと同じことである。天の羽衣は下帯である。神聖の神になられるまで厳重にしばつてある。その局所をゆるめれば神になるのである。

これが女の巫女の神とする思想よりこの天女の羽衣をかへした話になつて来る。つまり神と巫女と同格である思想が混同してゐる。この紐をといてはじめて自由になる。神事に入つてからしめたみづの小紐が天の羽衣である。だから宮中では紐をとく役、紐を結ぶ役が后となる。この役をするものは、ある時代には藤原と云ふ名になつたものであらう。ふぢわらは淵に関係あるものであらう。衣通媛は藤原に関係があつた。不比等の娘藤原夫人は又天武天皇の下紐の妃であつた。光明皇后は初めて立后の宣命まで下つてはじめて后が定まつた。光明皇后の伝説は紐に関するものである。

キサイチベのチは不明である。ともかくもその語根は后に関する部曲といふ事であらう。その本源は丹波にあり関東のものは、その分れであらう。熊谷氏は多治比氏であり、丹党ともいつてゐる。熊谷丹治直実と云ふのは多治比直実と云ふ事である。私党と云ふのも私部と云ふ事である。

私市部は巫女の部曲なる壬生の部曲で、後に皇后の立てる部曲になつた。それが名を失つて私市部と云ふ名に統一されて了つた。

日祀部

日祀部（ヒマツリ）は敏達天皇三年の条にはじめて出てゐる。この六年紀に日祀部と私部とがおかれる事が見えてゐる。日は普通天照大神であると云つてゐる。が、これは日置部と同格のものである。日祀は後に皆日置となり、ヘキとも云はれてゐる。イ列とオ列を重母韻による時にはエになる。hioki—heki である。大山守命の子孫に幣岐君がある。これは日置君と云ふ事である。日置と云ふのは柳田先生は日を招く部曲だと云はれてゐる。この説はア行ワ行の違ひである為に誤りである。日置（オヲ）と招きは別なものである。

日置は日を数へると云ふ事である。藤原為憲の口遊の中に置と云ふ語が出て来る。これは暦の数へ方と関係がある。日置は暦

を扱ふ部曲であると思ふ。日本に古く呪法を以て治めてゐた天皇がある。それが後に政治の意味をもつて来る。日置に二つの意味が出来る。古い日置と高麗の日置と二つになる。この日置諸国を廻つて暦の事を教へて歩いた。和名抄を見ると諸国に日置の地名、社、氏が沢山ある。これは朝廷の政策として暦を教へたからである。出雲風土記を見ると、神門郡の条に、

日置郷　郡家の正東四里　志紀嶋宮にあめのしたしろしし天皇の御世、日置伴部らつかはさるゝものきやどりてまつりごとをするところなり。故置郷と云ふ。

と見えてゐる。日置部の事を置部とも云つた。日置の伴部が来て、出雲に留つて政をなしたとあるのは天皇の祝詞をもつて来て伝達し、その文句の通りの効果をおさめて奏上するのが、まつりごとである。まつりは祝詞を伝達することである。もとは詔勅、祝詞の信仰である。この連中が沢山出て地方を廻つた。

日置伴部

日祀部は太陽神を祀る部曲ではない。貴い人を聖と云つたのは日知で天体の運行と気候の事を知つてゐる事である。即ちこれが天皇の事である。即ち天皇は呪法的王であつた。天皇の仕事は日を知らせる。つまり天皇の勅を以て諸国をまはり仕へる日祀部もこの部曲である。日祀は天皇の祝詞をよみあげる事である。みことのりである。日のまつりをしにゆく部曲を日祀部と云ふ。日のまつりを唱へにゆくもので、後に分らなくなつて日奉とも書いた。暦を教へる者が祝詞を奉持してそれを読み上げる形をとつた。敏達天皇の時、日祀部と私部と出来た。この時、日奉舎人部が出来てゐる。日祀に関して敏達天皇は深い印象ある天皇である。

日奉舎人部とは何か。舎人は宮廷に居るもので、もとは新しく服従した国の子弟を徴発し、男は舎人として女は采女として召し上げたのが、それを朝廷から臣下に配つたのである。天皇には采女、大舎人と書き、皇族には帳内、家臣には資人となる。この帳内資人は後に隨人と云はれた。舎人と云はれるのは、天皇直属の部曲である。令の規定による家人である。専ら天皇の従属となる。天皇の為に一代の叙事詞を伝へる。姓氏家系辞書を見ると、舎人の名が列べてあるが、皆、天皇（仕へてゐた）を記念する為に名が附いてゐる。即ち高級の奴隷である。

壬生部の方は天皇ばかりでなくともよい。広い意味の御名代部であるが、舎人は天皇に限る伝承をなしてゐる。日置部は即ち舎人部である。伴部とは聖職に与る人々である。天皇が日祀の仕事、日置の仕事をせられ、日祀部日置部は天皇直属の高い伝承部曲である。

日祀は暦を教へる部曲である。日本の天皇の最もの仕事は日祀である。これが日置部と云ふ様になる。天皇の本職は日祀である。それを諸国に分布したものは、日祀舎人である。天皇の御領にたづさはるものである。敏達天皇の時に日祀部と私部が出来たのは天皇の為に日祀部、皇后の為に私部が出来た。つまり、日本が帰化人を取り入れた。

先住民―学者の輸入―学者僧の道教が第三の区画に分れる。

道教を日本古代文化から去つたならば、残るべきものは殆んどない。暦法でも天皇の暦といふものがある。こゝに複合して来る。暦のことをひよみと云ふ。そのもとがひおきである。この部曲が段々、時代に依つて、変化してゆく。新暦を行ふ毎に諸国に撒布して移殖してゆく。

置

おき―つと云ふ動詞を考へる。日本人は過去の物語を語つて、現実の物語を感じてゐた。神の云ふ事が、これより将来に対する透し予言になる。おくは、将来に対し、将来を予めすると云ふ事である。おくが語根になつて、おきつと云ふ動詞になり、未来に及ぶ。即ち巫覡の語りが未来に及ぶのである。

もとは日祀で日置はそれより出た語と思ふ。日置部日祀部は時代によつて名前が変つてゐる。日を規定するものと云ふやうになつて来る。これが後には唱門師に合して、産所といふ産部落になる。そろばんを置いて占ひをするのである。

つまり日置舎人部はある点、御名代部の起原になつてゐる。舎人、天皇の場合には大舎人、それに対して小舎人。貴族豪族に下される舎人は仕へてゐる主人一代がその期限である。それが奈良朝末までの習慣で、その一代が過ぎると本官へ帰る。その帰つたものが、日祀部日置部であると思ふ。宮廷のあきつかみなる神ながら知ろしめす日をおく方法で、宮廷の宗教を教へるものである。これ等が諸国の日祀の宰領となる。さうして村を形づくるのである。これが御名代部を成立さす一原動力にもなる。舎人部がある以上、日祀舎人部から出て後に日祀の語を略して部曲を称したものと思ふ。

命婦

平安朝中期では命婦（ヒメトネリ）はさほどよい位置ではなかつた。令の規定は勝手な妥協である。命婦は支那の語であるが、内容は時代々々によつてかはつてゐる。命婦は采女の一部分である。女の舎人が諸国から出た。その中段々職掌によつて名前がかはつて行くが、大体采女である。その中、天皇の魂の役を取り扱ふものは命婦であつたやうに思はれる（仮説）。後々に命婦にヒメトネリと云ふやうになつた。

采女

令の規定では諸国の郡領の娘の容貌のいゝもの（政治と宗教と分離して宗教的にあるものは何々国造と称してゐた。政治上にあづかるものが、宿祢と称して郡領にある）一百人が召された。男の子は舎人として奉仕してゐる。男が舎人で女が采女である。采女は沢山あるが、その宰領するものは、物部氏になつてゐるが、これは嘘である。魂に関する部曲は皆物部氏と考へるのは後世の考へ方であつた。この采女が宮中へ出て天皇に奉仕してゐる。これが宮廷の女官の全部で、職掌によつて段階がついて来る。その間に命婦が出て来る。平安朝には命婦は中途半端な役であつた。奈良朝時代には五位を与へてゐる（令）。それをヒメトネリと云つてゐる。采女の中、最も有力なものであつた。

この命婦の中、皇族貴族へ下されたものが、外命婦のもとである。天皇が魂をしづめる為に臣下に下さつた。それが形をかへて奈良朝時代になると、外命婦に偉いものが出て来る。天皇から他へ嫁入させられる。資格は采女であるために宮廷へ出入りすると同時に外では魂を鎮める力を持つてゐた。五位以上の妻女で宮廷へ出入りしてゐるものとなつて来る。天胤説の起源は、采女を臣下に下されることからである。天皇の御手がかゝつてゐる女で、宮廷以外に夫を持つてゐた。それが外命婦である。命婦の上の采女は又別々な名をもつてゐた。上の女房の起源は采女である。平安朝の如く女房化してゐる。それ以前平安朝初期までは、主人が死ぬと采女は本官へ帰つたものが見えてゐる。これが采女部、婇部、采部が出来るもとで、これは京都から帰つた采女を中心とした一の村（職業団体）を作る。

采女部は日祀舎人部と同じもので、たゞ男女異にするだけである。古事記、日本紀其他の書に采女に関する伝承は采女部の伝承であらう。雄略天皇の時に、盃に槻の葉が落ちた采女の話、又朝鮮人と婚してはりつけにかゝつた話、又「うねめはや耳はや」の采女の話等も、采部の話が伝はつてゐるものである。采女部が物部から出てゐると云ふのは、昔の系図の正しい方の誤りである。この中、男が次第に表面へ出て来たが、女房の中に宿祢朝臣を称してゐるものがあるが、これは采女であつたからである。采女が日祀部と提携して大和の宮廷の旧信仰に変化させて来た。

暦法の宣伝は采女の方が力あつた。平安朝中頃から采女の地位は下降して来るが、それ以前は采女の上が命婦で、貴族の家に居るのが外命婦であつた。

宮廷に天皇のための役所に沢山の役人がある。寮、司等はこれで采女の朝臣から出ることになつてゐる。役所と部曲との関係が、こゝに話されなければならぬ。

役所と部曲

役所は団体の集まつてゐる所である。部曲のしぬびごとと役所の誄詞と併行してゐる。役所は宮廷直属の宮廷のまはりに居るもので、もとは天から連れて来られた聖職団体が宮廷付近に住んで生活してゐる。これが司である。宮廷の司をとくものは五伴緒で、中臣、忌部、玉造部、鏡造部、猿女の五つであつた。伴緒は新しく云ひかへると司である。伴緒は宮廷のまはりに住んでゐて、常に宮廷の仕事に奉仕せざるものは部曲（カキベ）、伴部となる。結局……部の誄詞、……司の誄詞とは同じことである。

采女部も宮廷の側にゐる団体で、諸国に散つてゐるものは別である。三河の采女部の如くなるものは地方へ移つたものである。天武天皇の崩御の時に（朱鳥元年）采女朝臣某が、誄内命婦事、即ち内命婦の団体に伝つてゐる物語をしぬびごとしたと云ふのである。

女房は采女の中の女房が勢力を持つて来た。女房でも命婦の階級は下つてくる。

この点で采女部は舎人部と同じ形のものである。宮中の舎人部は衛府に発達する。六衛府の長官の下のものは貴族より出る。

それが時代々々に勢力ある家の子弟がこの衛府のおさへになつてゐる。衛府と神事の関係が、女の方にもある。部曲と司との関係も研究すべき問題である。以上の部曲は荘園の発生に非常に関係あるものである。

万葉集巻二十の東歌の歌、防人の歌に、下総国の海上国造他田日奉直得太理

他田の日奉について考へようと思ふ。東国に他田の日奉の連が分布してゐたと思はれる。をさは奈良時代までの国語は通辞の事である。をさが通辞の意味をもつて来て、訳語田の如くなつて来た。姓氏録は誤りが多い。平安朝の初期から固定して唱へられたものが書かれてゐる。古い伝統を重んじたと云ふ事がある。これが中心をなしてゐる。

他田といふ事は普通他田の宮の時に出来た日奉部となつてゐる。他田は敏達天皇である。この日奉部を（長田、訳語田、他田）の日奉部といつて諸国に分布した。この日奉部は舎人がなる。日奉部と舎人は同じものである。日奉部の舎人は同じものである。朝廷に奉仕した舎人が帰国して宮廷の法式でその地方を教化した。敏達天皇から発したと称する日奉部は他田が勢力をもつたからである。

国造の子弟の中、男は舎人として京に召され、女は采女として、京に召された。それが帰ると国造を名告り、政治家ともなり、巫女ともなりしてゐる。大宝令以来の国造の位置はかはつたが、それ以来は宗教から出た政治権を持つてゐたのである。

国造家の本家は郡領となり、分家の方は宗教権を有して国造を称してゐた。国造の本家筋になるのは郡領となつた。昔の政治上では郡も国も同一範囲である。その国造の子弟子女が京より帰つて来る。国造と舎人とある。国造から舎人が出て、舎人が帰つて来ると、日奉の舎人部が本当の名である。

地方生活の統禦は、暦であつた。神の霊威によつて支配されたのである。他田日奉直得太理が国造であつたことは云ふまでもない。この得太理は上の海上郡のものである。これを見ても国造であり、日奉部の宰領であつた。

防人に助丁（宮廷へ召される者で、ヨボロは足で数へたのである。女の方はコハギで数へた）がある。助丁は一種の舎人で一度京都へ来たものが防人に派遣されたのである。舎人部の中に同じやうな時分に出来たものに倉舎人がある。姓氏録の説では欽明天皇の御子、倉皇子（蘇我氏の出）の御名を伝へるために出来た部曲であると云つてゐる。欽明天皇の御子（中の御子）に訳語田渟中倉太玉敷尊と云ふのがある。これは倉皇子と同じ方だと思ふ（仮説）。普通は倉舎人部と云ふ部曲は欽明天皇から出た部曲であると姓氏録の説をとつてゐるが、実は出雲風土記には志貴嶋の皇子と書いてある。倉舎人君と云ふものがあつた。その祖先が崇神天皇の御代出雲にやつて来た。

舎人郷　郡家正東廿六里。志貴嶋宮にあめのしたしらしし天皇の御代倉舎人君等の祖日置臣志毘大舎人つかへまつりき。即是志毘の居る所なり。故、舎人と云ふ。即ち正倉あり。

これを見ると、舎人は日置であると同時にお倉の事にあづかつ

てゐた。農作の暦を司る部曲であるために収穫を司ることは勿論である。これが後になると、倉を司る役人は皆帰化人になつてゐる。計算の達者な人であり支那風の暦を知つてゐる人である。算博士は天子にも関係してゐた。古くは日奉、新しくは日置に代つてゐる。

倉舎人は決して欽明天皇の時に出来たものではないと思ふ。欽明天皇の時の事実と敏達天皇の時の事実と又混乱してゐる。つまり倉の舎人がこの時に出来た。倉の舎人は御子の御子代ではない。その証拠にも一つある倉舎人部がある。倉を預かつてゐる舎人の事である。欽明天皇の時に出来たといふ説はあやしいものである。

他田日奉部は敏達天皇が他田宮に居られて、倉の舎人同時に日奉である者が何か印象深いことをした為に伝つたのである。他田は磯城郡（大和）に宮があつた。田と云ふことは土地の形を示したものである。もとは斜面に暮らしてゐて、下の湿地を田と称した。田に居る場所（物忌み）を田居と云ふ。田居は田居中と云ふ事である。湿地の所を田と云つた。その為に昔は土地を上下で区別した。添上郡に衾田と云ふところがある。こゝは低いことを意味するところである。他田（訳語田）と云ふ地名はもとあつて他田宮の時に倉の役人に変動があつた。こゝに訳語田のをさが浮いて来た。地名にもとから田と云ふところがある。田と分離して考へる習慣からをさを浮して考へた。日奉部は同時に倉の役人となつてゐる。世が変つて倉の役人は帰化人がする。算の名人が之にかはつてくる。以前の倉人も帰化人からなつた。倉人も同一に考へられて来る。こゝにをさの語が浮いて来る。倉人が訳語の役を務めたのである。訳語ををさと云ふのは他田舎人部や他田日奉部等と云ふをさから出たものと思ふ。

日奉にまだ形がある。舎人になつた者、或は帰化人を使つてゐたが、古いところでは先住民を使つてゐる。佐伯は野山に居る先住民である。土蜘蛛佐伯、国栖と称する原住民族と同じ考へを持たれてゐる。この海部佐伯は卜占を以てするものであつた。鹿と魚と暦を以てするものがある。海部佐伯の日奉は御倉に関係はないものと思ふ。

第二段の形が御倉に関係したものである。天子の名代部又は皇后の子代部は後に経済的基礎になつてゆく。あの人の為の記念の部曲を作ることに原因する事は勿論であるが、古代論理の復活思想から天皇の御名代、皇后の子代を新しい部曲として建設する。かうして経済基礎を定めて来て、お倉の制度が定まつて来る。天皇の倉は正倉（クラ）、皇后の為には屯倉（ミヤケ）があつたのである。この系統が定つて来て、鎌倉時代には後院の制度の争ひになつて来る。つまり天子の御領の区別があつた為である。天皇皇后めい〳〵一人に一つゞつ出来て来たのである。而も倉については沢山あるが、舎人部日置部が一貫して来る。